



脳力

Tomaty

零 脳力

人間の脳は未だ、10%しか使われていないと言われている。

果たしてそれは本当なのか。もし、それ以上の、つまり「未だ使われていない90%」を、人間が使えたとしたら、今の人類がどうなっていたか、想像もつかない。

ある男は言った。

「人類は、進化を遂げて続けている。我々の脳の殆どは未だ使われていない。しかし近い将来、必ず・・・必ずや今以上の力を発揮出来るようになるであろう。」

今、その話を聞いて考えさせられる人はどのくらいいるのだろうか。おそらく、殆どの人は深く考え無いだろう。

しかし、数十年前、未だ戦争が起きていた時代。誰が今の時代を想像したであろうか。

新人類が誕生した20万年前から、毎年、毎分、毎秒、イノベーションが絶える事は無かった。

さあ、想像してみよう。数年後、数十年後の未来を。

人間は未知数だ。可能性は無限にある。

1 北川健人

俺は北川健人、23歳。

大学を卒業し、就職浪人という世間的に見れば落ちこぼれ男だ。

あまり将来に希望が持てず、今は、レンタルビデオ屋のアルバイトをしながら、なんでもいいから何か仕事でも見つけようとする、そんな日々であった。

俺は4人家族の長男である。父は、無口で、必要以上に喋らない。昔はやんちゃをして困らせたこともあったが、いつも「自分が正しいと思うことだけをやりなさい」と一言。それで俺は反省させられていた。貿易関係の企業に勤めているが、もうすぐ定年退職するそうだ。

母は、ごく普通の主婦で、いつも笑顔が絶えない、可愛らしい人だ。ただ少し、心配性すぎる。

■

真っ最中。大

変な時期だ。

小さい頃は、父の仕事の影響で引越しばかりだったが、今は東京の東区で落ち着いた。

父が言うには、もう転勤はないとのことで、家族会議を行い、家を建てることにした。

家は2階建ての一軒家、父がローンを組み、念願の新居を手に入れたのは3年前のことだ。

特に不自由だった経験もなく、大きな挫折を味わったこともない。

そんな平凡な環境の中で育った俺は、あまり貪欲になれず、ただただ波風を立てないように生きてきた。

しかし、こんな俺でも夢くらいある。というより、あった。といったほうが正確だ。

それは、自分の会社を持つことだ。

会社といっても、小さなオフィスで、人を指揮し、利益を生む。そういうことに憧れていた。

中学の時たまたまある本を読んだ。全く覚えていないが、多分経済関係の本だろう。そこに書いていたんだ。「世界を動かすのは企業で、企業を動かすのは人間だ。つまり、人間を動かす企業になれば、世界を動かす存在になれる。」その言葉に影響を受けたのは事実だ。

そんな夢を抱き、大学では経済学を学んだ。

大学時代は、人並みに勉強はでき、特に必死で頑張ったというような、人に自慢できるようなことはないが、卒業はできた。卒業後も、独学で勉強は続けているが、昔ほど真剣には取り組んではない。

景気は良くなっていると言われていているものの、就職難に変わりはなく、起業どころか雇ってさえもらえない。

就職もせず、周りから早く就職しろと言われる辛い毎日だが、正直この生活がそこまで嫌いというわけではない。

早く自立したいとも思うが、親に甘えられるうちは甘えたかった。

「先輩、今日飲みに行きませんか？」

バイト中、後輩の竹盛が誘ってきた。

「いいけど、割り勘な」

あからさまに焦る、竹盛。

「ちよ、まじっすか！そこはお願いしますよー！」

「最近生活厳しいんだよなー。」

竹盛がまっすぐ俺を見つめている。

まあ、こいつと飲むの楽しいからいいかと、つい承諾してしまった。

「わかったよ。じゃあ、いつもの店な！」

急に表情が明るくなる。全く、単純だなあ。

「さすが先輩、太っ腹一。ちなみに今日、女の子も誘ってるので！」

竹盛は俺とは違い友達が多い。まあ、明るい性格だから、それもそうか。

俺も少しは見習わないとな。

「■」

「ちょっと前に俺、入院してたじゃないですか。その時の看護師さんです。」

「まじか。お前イタリア人かよ。」

なぜか照れる竹盛。

「8時にいつもの店で、大丈夫ですか？」

「了解。8時な！」

バイトが終わり、俺は一度家に帰った。

「ただいまー」

「ケンちゃん、おかえり。」

いつものように母はキッチンで料理をしている。

「すまん、母ちゃん。今夜後輩と飲みに行ってくる」

「もうご飯できちゃうわよー。ちゃんと連絡してって言うてるでしょー」

「ごめん、母ちゃん。」

着替えをしに部屋に戻ろうとした時、

「ケンちゃん、さっき男の人が会いに来てたわよ」

「男の人？」

思い当たる節はなかった。

「なんかスーツ着た、強面の人。 」

誰だろう。

「んー、わかんねえなー 」

「また明日来ます、って言ってたわよ 」

「ふーん。わかった。でも俺明日もバイトだから、もし来たら電話番号渡しといて！」

「わかったわ。 」

「サンキュー 」

そう言って、俺は部屋に行き、着替えを済ませ、時間がないためタクシーを拾った。スーツを着た強面、、、誰だろう。タクシーの中、ふと考えてみたが特に答えは出なかった。そうこうしているうちに、目的地に着いた。入り口には竹盛が既に待っていた。

「ちょ、先輩！はやくはやく。もうみんな待ってますから 」

「別に遅刻してるわけじゃないんだし、急かすなよー 」

「そんなことより早く中入りましょ。可愛い子ばかりですから、今日は 」

「お、、、おう」

実は、少し緊張していた。女の子とお酒を飲むのは久しぶりで、それどころかここ最近ろくに喋ったことがない。

「先輩到着！こちら、バイトの先輩の健人さん。 」

軽く会釈をする。

「こっちが、コトちゃん、こっちがセイラちゃん。 」

竹盛の言う通り、本当にかわいい子が二人座っていた。そして、俺の鼓動も更に早くなったのがわかった。

「初めまして。 」

「初めまして、健人さん。 」

「初めまして 」

コトに続き、セイラも挨拶をする。

「じゃあ一人ずつ、更に自己紹介をお願いします 」

相変わらず、竹盛はハイテンションだった。

「まずは俺から。竹盛和也、21歳の大学3年生です。先輩と一緒に、近くのレンタルビデオ屋でバイトしています。ちなみに、彼女はいません。よろしくお願いします」

パチパチパチ。

「健人です。今はフリーターです。 えっと、、、宜しくをお願いします 」

「先輩、何緊張してるんですかー 」

「うるせえよ」

二人とも笑ってるから、まあいいか。

「じゃあ次、コトちゃんお願いします。 」

「はい。篠原琴子、21歳です。北城大学に通っていて、大学近くの病院でバイトしています。将来は看護師を目指しています。宜しくをお願いします！」

「看護師ー！素敵ー！あとでいろいろ聞かせてねー。じゃあ次、セイラちゃん 」

「はい。えーっと、、、。 」

彼女も、緊張しているようだ。

「セイラです。コトちゃんと同じです。宜しくをお願いします。 」

彼女の緊張している姿がなんとも印象的で、可愛らしかった。

彼女の自己紹介が終わると同時に、店員さんがビールを持ってきた。

「みんなビールなの？ 」

「先輩いつもビールじゃないっすか。それにやっぱり乾杯といえばビールですよ！ 」

「じゃあみんな、グラス持って。先輩、一言お願いします」

「え、俺？」

「そりゃそうですよー。最年長なんですから！」
それもそうだな。

「今日はみんなよろしくね。乾杯！」
「かんぱ〜い」

カチャんと、みんなのグラスが音を奏でる。

「二人ははいつから友達なの？」
この質問をするだけでも、少し勇気を振り絞っていた。
情けない。もっと頑張らないとな。

「えっとー、小学校から一緒なので、ずっと前から知ってます。でも実際仲良くなったのは、大学に入ってからで。高校までは、特に話したことなかったんですよー」

「でもわかる。そういうことあるよね。たまたま同じクラスにならなかったとかで。」

「そうなんですよー。ねえ、セイラ」

「う、、、うん。」

「ちょっと、セイラまだ緊張してるの？すいません、この子緊張しいなんで」

こういう場所、あんまり慣れてないんだろうな。

その後もたわいもないことを話しながら、時間は過ぎ、
「今日は楽しかった。みんなありがとう。」

つつい楽しくなっちゃって、飲み過ぎてしまった。まあでもこいつに比べたら。
「先輩やっぱ強いっすねー。俺もうベロベロですわ」

「お前、そんなになるまで飲むなよなー」

竹盛が、不気味ににやける。

「先輩。俺コトちゃんと帰ります」

「そうか、方向が一緒なのか？」

「いえ、俺が家まで送るって約束したんです」

毎回感心させられる。俺もそのくらいガツガツしないとな。

「わかった。ちゃんと帰れるのか？」

「はい、なんとか。じゃあセイラちゃんをお願いします」

そうか、そうなるよな。

「おう」

と、いうわけで二人きりになってしまったのだが。

「家どこらへん？良かったら送るよ？」

「いえ、歩いて10分くらいなので大丈夫です。今日はありがとうございました。とっても楽しかったです。」

やっぱりかわいいな。この笑顔がなんとも言えない。

「わかった。気をつけてな。じゃあまた。」

「はい。ご馳走様でした。」

と、って、軽く会釈をし、振り返って歩き出す。

しかし、ビルの角を曲がる手前で、動きが止まった。

再び振り返り、こっちへ戻ってきた。

なぜか、暗い顔をしていた。

どうしたの？と聞こうとしたその時。

「やっぱり、近くまで送ってもらっていいですか？」

なぜ気が変わったのかわからないが、正直嬉しかった。

「もちろん、まだ終電大丈夫だし。」

なんて、もう終電には間に合わない。もう少し彼女と居たい。そう思ったからだ。

「ありがとうございます。」

俺は暗い夜道を、セイラと一緒に歩いている。

こうやって二人並んで歩くと、こんなに身長小さいんだな。

さっきまで、あんなに笑っていたのに、なぜか急に沈んだ顔つきになっている。

「どうしたの？なんか表情暗くない？」

「・・・」

あれ？どうしたんだろう。

「実は私、、、」

沈黙が走る。

言いづらい事なのだろうか。

そして、ゆっくりと口を開く。

「ストーカーされてるんです。」

「え！」

正直驚いた。本当にストーカーっているんだ。

「いつ頃から？」

「1週間くらい前からです。」

「警察には行った？」

「まだ行ってません。どうすればいいかわかんなくて。親も仕事が忙しいので、な

かなかかまってくれなくて。」

「そっか。明日午前中空いてる？バイト行く前に警察に一度行ってみよう。」

「え、いいんですか？」
彼女に少し、笑顔が戻った。

「もちろん。俺でよければいつでも協力するよ。もし何かあったらすぐ連絡して。」

「はい。助かります。あの、、、」

「ん？ああ、連絡先？」

「はい。」

そうやって、連絡先を交換した。
女の子の連絡先が登録されるのは数年ぶりだった。彼女には悪いが、この状況で少しだけ嬉しかった。

「ここです、私の家」
そこには、大きなビルが建っていた。
「高いビルだねー。何階に住んでるの？」

「62階です。」

可愛い上にお金持ちときたら、
俺とは世界が違うな。少し落ち込んでしまった。
「じゃあ、また明日。」

「はい。」

「朝10時頃迎えに来るね。」

「ありがとうございます。おやすみなさい。」

「おやすみ。」
そうやって俺はタクシーを拾い、家に帰った。
家に帰ると、梨花がまだ起きていた。

「まだ起きてるのか？はやく寝ろよ」

「うるさい。健人も夜中まで遊び歩いてるくせに」
俺の反抗期は、こんなにひどくなかった、なんて思いながらも。

「はいはい。おやすみー」
深夜を回り、疲れていた俺は風呂にも入らず、

ベットで横になり、すぐ眠りについた。

なんだここは。

夢か？

真っ白な部屋の中。ここには何も無い。

なぜだろう、頭の中がぼっかり空いている気分だ。あれ、体も動かない。ただ、その白い部屋を見ることしかできない。

ただ、恐怖を感じることもない。なぜだろう。

感情がコントロール出来てないのだろうか。するとその白い部屋が、一気に真っ赤に染まっていく。

視界の全てが赤になった。なんだこの現象は。

ピピピピピピ

アラームがなる。

そりゃあ夢だよな。

悪夢とは言えない、変な夢だったな。

ふと時計を覗くと既に、9時を過ぎていた。

急がないと10時に間に合わない。

そう思い、急いで支度をする。

1階に降りると、母が朝食を用意してくれていた。

「ケンちゃん、もうバイトなの？」

「いや、バイトの前に少し用事があって。」

「あらそう。ご飯は食べて行きなさいよ。」

「ああ、でも時間ないからトーストだけ」
俺の朝はいつもこんな感じだ。

「じゃあ行ってくる」

「はい、気をつけてね。あ、今日また、昨日のお客さんが訪ねてくると言うから、ちゃんと連絡先渡しとくわね。」

そうだった。黒いスーツの男。忘れてた。

「うん。よろしく。じゃあ行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

電車に乗ったのは久しぶりだ。バイト先までは歩いていけるから、電車はあまり利用しない。特にこの時間の電車は満員で、みんなスーツだ。

みんな仕事をしているんだと思うと少し、胸が痛くなった。加えて、俺も早く仕事見つけなきゃ、改めてそう思った。

そして、彼女の家に着き電話をかけた。

「おはよう。ついたよ！」

「今行くね」

当たり前だが、昨日とは違う服を着て彼女が階段から降りてきた。

どんな服でも可愛い。確かに、ストーカーの気持ちもわからなくはないかも。

いや、いかんいかん。良いわけがない！

「わざわざ来てもらってありがとうございます。」

「いえいえ、じゃあ行きますか。」

彼女はコクリと頷いた。

歩きながら、セイラの家族について聞いてみた。

「両親仕事で忙しいって言ってたけど、何の仕事してるの？」

「父は、ソフトウェア開発の企業を経営していて、母は、ジュエリーデザイナーをしています。」

なるほど、社長令嬢か。色々と納得できた。

「二人ともほとんど家にはいなくって。」

「二人とも仕事大変なんだね。兄弟は？」

「兄弟はいない。一人っ子です。」

「いいなー一人っ子。俺の妹今反抗期で、いつもうるさいんだよなー」

「健人さん妹いるんですね。」

「あれ？言わなかったっけ？」

「聞いてないですよ。初耳です。」

「そうだっけ。」

なんて話している間に、警察署についた。

中に入ると、受付係があり、そこに向かった。

「何かお困りですか？」

「はい。実は、、、」

言わずらそうだったので、代弁をする。

「彼女、ストーカー被害に遭っているので、相談しに来ました。」

「わかりました。少々お待ちください。」

「こちらの被害報告書の方に、記入をお願いします。」

「はい。」

彼女が名前や住所など、必要事項を記入する。

「書きました。」と一言。

「はい、少しこちらでお掛けください。」

案内された席に座る。

数分後、ガタイのいい男刑事がやってきた。

「初めまして。刑事の高松と申します。」

ストーカー被害の相談で、刑事が対応してくれるとは思っていなかった。

初めまして、と挨拶を済ませ、本題に入る。

「今回はストーカー被害にあったということで、よろしいですね？」

「はい。そうです。」

「では、そのストーカーの特徴はわかりますか？」

「背が高くて、スーツを着ていました。それだけしかわからないです。」

「どのくらいの頻度でストーカー被害に遭いますか？」

「ほとんど毎日です。1週間ほど前からストーカー被害にあうようになり、昨日は健人さんと帰ったので、問題なかったのですが。」

そんな頻度で被害にあったのか。

「そうですか。今のところ、話をかけられるなどはありませんか？」

「いえ、それはまだ 」

なるほどと納得した刑事さんが、

「名刺を渡しておきますので、何かあったらすぐに連絡してください。なるべく巡回の回数を増やせるようにしますので。」

「はい。ありがとうございました。 」

お礼をし、警察署を出た。

「とりあえず、今夜も俺が送るよ。 当分は、危険だからね。 」

「本当ですか？ありがとうございます。 」

「大学は何時に終わるの？ 」

「大学は3時頃終わりますが、そのあとバイトなので、帰るのは大体9時ごろになります。」

「今日は俺もバイト終わるのそのくらいだから、ちょうどよかった。じゃあまた後でね。」

「はい、また後で。 」

セイラと別れて、バイト先へ向かった。

バイト先の事務所に入ると、竹盛がニヤニヤしながら寄ってくる。

「なんだよ気持ち悪いな。 」

「気持ち悪いってひどいなー。 それで、それで？昨日あの後どうでした？ 」

「別に何も無いよ。セイラの家まで送って、そんで帰った。 」

「なんすかそれー。彼女のこと気に入ってたじゃないですかー。 」

「そういうお前はどうかんだよ？ 」

「俺は、もう次のデート約束しました。 」

なんてやつだ。そういう所は後輩ながら尊敬できるよな。

その後も俺達は談笑を続けながら、制服に着替えた。

休憩中、電話がかかってきた。知らない番号だ。

「はい、もしもし。」

「北川さん？」

うわ、なんかガラの悪そうな声してるな。

「はい、そうです。」

「こちら、道東金融のものです。」

「道東金融？」

例の家に現れたスーツの男か。

「北川さん過去に、刻山龍一の借金の保証人になってらっしゃいますよね？」
確かにそうだ。しかし、あいつは今仕事に成功して、借金も返済したと聞いた。

「そうですが、あいつはもう借金を返済したんじゃないんですか？」

「それがねー、あと50万円の返済を残して、飛んじやったんですよ。」

なんだと。確か、最初は300万円借りていたはず。なぜ残り50万円払えなかったのだろう。それに、今あいつの企業は景気がいいはずだ。

刻山龍一は1年前に起業した。その当時、どうしてもお金がかかるとの事だった。あいつには才能があり、必ず成功すると思った。親にも頼めないからって、結局俺が代理人になった。

「あいつの会社はどうなったんですか？」

「実は1ヶ月前に倒産してしまいました。」

正直驚いた。と同時に、龍一が心配になった。

「というわけなので、色々話をしたいのですが。」

「わかりました。明日の午前中に伺います。」

「はい。ではまた。」

そして、すぐ俺は龍一に連絡を取る。
飛んだということは、電話に出ないだろうと期待はしなかった。

プルルルプルルル

「はい。」

「龍一？健人だけど。」

「あっ、ケンちゃん久しぶり」
あれ、あっさり出たな。

「お前借金返してないの？さっき道東金融から電話あって、お前が飛んだって言ってたけど。」

「え？そんなはずはない。きっちり全額返済したぞ」

「そうなのか？じゃあ倒産したってのも嘘か？」

「なんだよそれ、縁起悪いこと言うなよな。売り上げも上々で、むしろこれからって時なんだぞ」
どういふことなのかわからなかった。

「お前が飛んだから、代理人の俺に50万返せと、電話があったが。」

「なんだよそれ。俺から電話してみる。迷惑かけて悪かったな。」

「ああ、よろしく」

「今度のみにもでも行こうな、じゃあ」

プー、プー

電話が切れた。

よくわからなかったが、とりあえず安心をした。

「ちよっと、先輩。いつまで休憩してるんすかー。」

「はいはい、今戻るよ。」

2 白髪の男

「お疲れ、帰ろうか。」

俺はバイトが終わり、セイラを迎えに来ていた。

「はい。」

夜中二人で歩いていると、背後に気配を感じた。ふと振り返ると、木の陰に黒い影が見える。

まさかと思い、走って駆け寄る。するとその影は、さっと消えた。

俺は、ストーカーだと思い、その人を追いかけたが、見つからなかった。

「誰かいました？」

セイラが不安そうな顔で聞いてきた。

「人影が見えたが、どこかに逃げて行った。」

「もしかして？」

「さあ、どうだろう。とりあえず急いで帰ろう。」

「はい。」

警察に連絡しようと思ったが、した所であまり期待はできないだろう。

彼女を家に届け、俺は帰宅した。

家に帰ると、母さんは座りながら本を読んでいた。

父さんと梨花は、ソファに座りテレビを見ている。

これがいつもの、家族の光景である。

「ただいま。」

「あ、健人おかえりー。今日綺麗な女の人と歩いてたね。」

梨花に見られてたのか。

「あらー。ケンちゃん、彼女できたのね。」

「そんなんじゃないよ。とりあえず風呂入ってくる。」

そう言って俺は部屋にカバンを置き、風呂場へ向かう。

湯に浸かりながら、いろいろなことを考えた。

ここ数日俺の周りで起きた事。

セイラのストーカー被害に、道東金融と龍一の矛盾。

が結局、何一つわからなかった。

体がのぼせてきたので、風呂を上がり、ご飯を食べ、ベッドに入る。

次の日は、午後からバイトだったので、タイマーをかけずに、ギリギリまで寝るつもりだった。

しかし翌日の朝、電話がかかってきた。

「はい」

「北川君さん？いつ来ます？」

「あの、龍一からも連絡きたと思うんですけど、彼ちゃんと返済したらしいじゃないですか。」

「昨日も言いましたが、まだ返済をする前に、逃げられましてね。」

「でも昨日電話でちゃんと、、、」

「とりあえず、来てくれる？」

どういうことだ？ますます混乱した。

まだベットから出たくなかったが、面倒に巻き込まれる前に、解決したかった。

「北川様ですね。お待ちしております。こちらへどうぞ」

若い女性の受付の子が案内してくれる。

案内されるがままに、奥の部屋へ向かう。

すると、部屋にはすでに黒いスーツを着た男が座っていた。

「どうも、北川さん。とりあえずそこ座ってくれ。」

うわー、極道のドラマでよく見るタイプの、いかつい顔をした男だった。

「あの、さっそく本題なのですが。」

「まあまあ、そう焦らずに。これでもどうぞ。」

そう言って、お茶と茶菓子を先ほどの女性が持ってきてくれた。

「どうも」

「悪かったね、何度も実家の方に伺って。」

「いえ。」

「でも安心してくれ。君が借金をしているということは言ってない。」

「あの、僕は借金をしていません。龍一が返したと言っていました。」

「電話でもお話したけど、実は龍一と連絡が取れない状況だ。会社ももう潰れているから、どうしようもない。」

そんなはずはない。俺は反論した。

「昨日電話しましたが、ちゃんとつながりました。会社のほうも順調って言ってましたし。」

「北川さん。百聞は一見に如かずだ。私はこの目で見てますから。」

どうのことだろう。龍一の方が嘘をついていたのか。
不安になりもう一度電話をかけてみる。

・・・お掛けになった電話番号は・・・
繋がらない。

「ね？分かったでしょ？」

「は・・・はあ」

俺はまだにわかに信じられなかった。
昨日の龍一の声、嘘をついているような感じではなかった。

「すみません。やはりまだ信じられないので、一度会社に行ってみてもいいですか？」

「仕方ない。それで納得するなら。」

俺達は会社に向かった。

そして俺は、道東金融の黒いバンに乗せられて、龍一の会社へ向かった。

バイトは遅れそうだ。連絡しておこう。

「あ、店長ですか。北川です。申し訳ないのですが、今日出勤を3時頃にずらしていただけないでしょうか？」

「めずらしいな。何かあったのか？」

「すみません。ちょっとトラブルに巻き込まれてしまって。」

「そうか。竹盛に早く来られないか連絡してみる。」

「助かります。ありがとうございます。失礼します。」

そして俺達は会社に着いた。道路脇に車を止め、ビルの中に入る。

なんだこれは。本当に空っぽで、差し押さえの紙が貼られていた。

一等地に建てられた、立派なビルだが、数年前に来た時とはえらい違いだった。

この景色を見て、俺は確信した。

騙された。あいつは俺に嘘をついたのだと。

「北川さん、お分りいただけたか。あんまり友達は信用しちゃだめだぞ。では、来週までに利子だけでいいから、支払いよろしく。」

この状態を見せられたらもう何も言い返せなかった。あいつを信じた俺がバカだったのだ。自分に腹が立った。

そして俺は、重い足を運んでバイト先に向かった。

「ちょっと先輩。どうしたんですか？先輩の代わりに俺が1時出勤になっちゃいましたよ」

「ああ、わりい。今度変わるから。」

「ちょっと、先輩テンション低くないですか？どうしたんですか？」

「悪い、色々あってな。」

今は、何も話せる気分ではなかった。

50万円か、、、今の俺には相当な痛手だな。

それから1週間が経ち、俺は未だに借金を返済できていなかった。

それもそうだ。50万円なんて俺にとっては大金だし、実家暮らしとはいえバイト代だけで返していくのは辛い。とはいえ、こんなこと親にはいえない。就職をしてないってだけでも心配をかけているのに、これ以上心配をかけたくない。

くそ、龍一。覚えてろよ。

さらに数日が経ち。

目の前にバンが止まった。見覚えのある車だ。

「北山さん、久しぶり。返済いつしてくれるの？」

ああ、また来やがった。道東金融。

「すみません。もう少し待ってください。」

「またそれ？もう聞き飽きたんだけど。」

あなたが払ってくれないなら、こっちもそれなりのことをさせていただきますよ。 」

「ちょっと、それどういう意味ですか？ 」
少し熱くなってしまった。

周りにいた手下達が一気に、俺に向かってくる。

「ああ、なんだその態度は 」
胸ぐらをつかまれ、ビビってしまう。

「まあ楽しみにしといてや。 」

そう言って、俺を突き飛ばし、車に乗って消えていった。

どうしよう。俺は精神的に追い込まれていた。
その晩は、食事もせず眠りについた。
母が心配していたが、食欲がないのだからしょうがない。

次の日、俺はいつも通りバイトを終え、帰り道を歩いていた。
静まり返った暗闇。風に吹かれる葉の音だけが聞こえる。

ブオー————、キキィー。
車が俺の横に止まった。

そこからスーツを着た男たちが数人出てきた。
すると、逃げる間も無く頭に何か黒いものを被せられた。

「ちょ・・・なんだよお前ら 」

俺は必死に抵抗した。しかし、相手は数人、体を持ち上げられ、車の中に入れられた。

「誰かー！」

俺は必死になって叫んだ。しかし、車はもう進んでいる。なぜか頭がぼーっとしてきた。何かの薬だろうか。それでも俺は、暴れ、叫び続けた。しかし・・・ついには、意識がなくなってしまった。

「なんだここは。 」

ふと目をさますと、そこは真っ白の部屋だった。手足は椅子に縛られ、身動きの取れない状況だ。

見たことがある景色だったが、そんなことを考えている余裕はない。

「誰かー。誰かー。」

俺は必死に叫ぶ。しかし物音ひとつ聞こえない。
よく見ると、部屋の右隅にはカメラが設置されていた。あれで俺を監視しているのか。

すると、白い壁から、ある男が出てきた。

あんなところにドアがあったのか。

「北川様、お目覚めですね。」

スーツを着たく白髪の男だった。

「お前何してんだよ。ここはどこだ。」

「まあまあ、落ち着いてください。北川様には一度死んでもらいます。」

「ふざけるな。」

そう言って、俺は必死に暴れ、椅子が倒れてしまった。

「ああああ、大丈夫ですか？怪我しないでくださいね。大事な実験体なんですから。」

そう言って不敵な笑みを浮かべる。

「こ、、、このやろう。なんだよ実験体って」

「そろそろ、また眠くなる頃ですね。」

そう言って、その男は部屋を出て行った。

「おい、ちょっと待てこの野郎！

おい・・・ちょっと・・・待て・・・」

再び目をさますと、俺は病院で横になっていた。

まだ、意識は朦朧としている。

周りには誰もいない。

起き上がろうとするが、体が動かない。

何かで押さえつけられているわけではないが、

うまく体が動いてくれない。

すると誰かが入ってくる音がした。

「北川君、意識戻ったのね。」

と言って、こっちへ向かってくる。

看護師だった。

「よかったー。すぐに家族に連絡するわね」

俺は、しゃべることさえできなかった。

1時間後、母と梨花が大急ぎでやってきた。

「ケンちゃん大丈夫？」

母が涙目で心配そうにこっちを見ている。

「健人。よかった。意識戻ったんだ。」

梨花は制服のままだった。学校を抜けてきたようだ。

「お父さんは、仕事が終わる次第すぐに来るらしいから。」

わざわざ来てくれなくてもいいのに。

「警察の人の話によると、あなた公園のベンチの上で倒れてたそうよ。
近所の人是最初寝てるんだと思ったらしいんだけど、二日間も動かないから警察に連絡してくれたんだって。

なにがあったの？あなた電話で友達の家泊まるって言ってたじゃない。」

何だそれ、俺はそんな事言った覚えはない。

「何があったの。ケンちゃん」

母は俺の肩を掴み、泣きながら尋ねられた。

「まだ意識を戻したばかりですので。それにまだ、しゃべることもできない状態ですし。
もう少し時間がかかります」

そういつて、看護師が母を俺から離す。

「そうだよお母さん、落ち着いて」

母はなんとか落ち着きを取り戻し、一度家に帰った。梨花も学校へと戻って行った。

なぜだろう。目をつぶっていても眠れない。
わからないことが多すぎて、頭が痛い。
眠りにつきたいが、いつまでたっても寝られない。

すると、再び病室のドアが開いた。

「健人さん？」

セイラだった。

「よかった。妹さんから連絡いただいて。」

いつの間に妹は、セイラとつながっていたのだろうか。
そんなことはともかく、俺は嬉しかった。

「まだ喋れないそうね。でも聞くことはできるかな？」

俺は返事をしたかった。でもできない。

「聞こえてるって信じて、話すね。」

「一昨日、この病院に健人さんが運ばれてきた時はびっくりした。意識を失ってて、二日間も倒れてたと聞いた時は正直、もうダメかもしれないと思った。だから、目を覚ましてくれて本当に嬉しい。」

そうか、確かセイラはこの病院でバイトしてるんだっけ。

「それで、梨花ちゃんが私に声をかけてくれたの。” 兄を宜しく願います。”って。」

梨花が、そんな風に言ってくれてたのか。

「反抗期って言ってたけど、かわいい妹さんですね。それに、付き合ってるか聞かれたから、ちゃんと
言っておきましたよ。まだ彼女ではないって。」

そういつて笑った彼女は、本当に可愛かった。そして、“まだ”という言葉に心が躍った。

「それとね、健人さんも協力してくれた、ストーカーの件だけど、ここ数日は見なくなった。もう私に飽きちゃったのかわからないけど、とりあえずこれで一安心。協力してくれてありがとう。」

ああ、しゃべりたい。

くそ、なんで声がでねえんだ。

「そろそろ私、学校戻るね。また来ます。」

そう言って、セイラは病室を出た。

三日前の誘拐が嘘かのように、幸せな時間だった。

しかし、一体あれはなんだったんだろう。

とりあえず、今は体が動くのを待つしかない。

夜には父もきて、俺の安否を確認すると。

「また来る。」

と言い残して、帰って行った。

そして俺は、再び目を閉じた。

ふと目を覚ます。

気づいたら、朝になっていた。

様子がおかしい。

そうか、視界がはっきりしている。

あれ、、、体も動くぞ。

「治ったんだ。」

普通に戻っている。いったい俺はどのくらい寝ていたのだろうか。

とりあえず、ナースコールを押した。

すると、いつもの看護師が来た。

看護師は目が飛び出んばかりの驚いた顔をして、こっちを見ていた。

「北山くん！嘘でしょ？もう治ったの？」

「はい。もう平気です。体も全く問題ありません。」

異物を見るような目で、俺を見る。

「俺どのくらい寝てたんですか？もしかして、数ヶ月間起きなかつたりして。」

「あなたは、1日しか寝てないわよ。昨日の時点ではまだ、体も動かなかつたし、しゃべることもできなかったの。」

「え、昨日？」

あれは、昨日の出来事だったのか。

さすがに、自分の回復力が信じられなかった。

「ちょっと先生呼んできますね」と言って、慌てて病室を出る。

自分の手を見つめる。普通に動く。足を動かし、全身が動くのを確認する。

頬を引っ張り、痛みを感じる。

たった1日だけだが、全く体が動かないという事を経験すると、この普通のことでさえも幸せに感じられた。

そして、数十分後には母と梨花、そして警察と一緒に来た。

「健人くん。まだ回復したばかりで、大変だろうが話を聞かせてくれないか？」

「はい。」

見覚えのある刑事さんだった。

そうか、高松刑事だ。

そして俺は見たままの事を伝えた。

ある男に拐われてしまった事。

白い部屋に監禁され、謎の男を見たという事。

「何か思い当たる節は？」

「いいえ、全く。」

「そうか。」

「あ、実は俺借金があつて。道東金融って所に。」

「ケンちゃん、あなた借金してるの？」

母が間を割り、入ってきた。それもそうだ。驚かない訳がない。

「友達の代理人になっちゃって」

「それで？」と刑事さんが話を戻す。

「そこのお金を返せなくて、恨まれるとしたらあそこくらいだと思います。」

「なるほど、貴重な情報をありがとう。こちらでも、色々と調べてみるから、他に何か思い出したことがあったら連絡して。」と言われ、名刺を渡される。

「以前、名刺頂いたので大丈夫です。」

「どこかでお会いした？」

なんだ、もう忘れたのか。

やっぱりストーカーの件も大して調べてないんだろうな。

「実は少し前に、」

プルルル。着信音が鳴る。高松さんの携帯だ。

「ごめん、健人君。また後で。」

そう言って、電話に出ながら刑事さんは病室を出た。

「ちょっと、健人どういうこと？」

珍しく母が少し怒っている。

「ごめん、母さん。龍一って覚えてる？ 俺と同じ大学だった。何度か家に連れてきたこともある。」

「覚えてるわよ。」

「あいつが起業するからって、その道東金融にお金借りたんだ。まだ学生だったし、銀行じゃなかなか貸してくれないだろ。その時に、親の協力も得られないから、頼れるのお前しかいないっていわれて、代理人になっちゃった。」

「なんで一言相談しなかったの？」

「ごめん。こんなことになるとは思わなかった。」

「それで今龍一君はどうしてるの？」

「それが、見つからないんだ。会社に行ってみたけど、すでに空っぽだった。」

「そう。でも、健人が無事でよかったわ。」

正直驚いた。さすがにもっと怒られると思っていた。

「なんとかそのお金は用意するわ。」

「それはダメだ。自分で返すから。なんとかして少しずつ返すよ。」

「そう。何かあったら、すぐ相談するのよ？わかったわね？」

「わかった。ありがとう。」

「先生が明日には退院できるって言ってたから、また迎えに来るわね。」

「ああ、わかった。」

「行くわよ、梨花。」

「はい。あ、健人。セイラさんにも意識戻ったこと連絡しといたから」と、なぜかニヤニヤしている。

「おう、サンキュー」
少し、照れてしまった。

再び、一人になってしまい。外の空気でも吸いに行こうと、屋上へ受かった。
するとメールが来た。
セイラからだった。

「もう治ったんだってね。正直信じられません。今日はどうしても行けそうにないから、
退院後に、食事でも行きましょう。」

「自分でも信じられない。もう今はピンピンしてるよ。また連絡する。」

久しぶりに見た空は、すでに茜色の澄み通った色をしていた。
こんな綺麗な景色を見たのはいつぶりだろう。
すごく気持ちのいい空気であった。

「お世話になりました。」
先生と看護師に挨拶を済ませ、母と病院を後にする。

「お腹すいたでしょ？どこかでご飯でも食べて帰る？」

「ごめん、俺バイト先に挨拶しに行かなきゃ。」

「それもそうね、じゃあ送って行くわ。」

「ありがとう。」

バイト先につき、母には先に帰ってもらった。

「店長、急に休んですいませんでした。」

「事情は、親御さんに聞いているよ。大変だったね。」

「はい、ご迷惑をおかけしてしまっ。」

「あ、先輩！もう大丈夫ですか？」
竹盛がこちらに気づき歩いてくる。

「おう、心配かけたな。もう大丈夫だ。」

「よかったー。先輩来ないとバイトつまないっすよ。」

「おい、俺じゃ不満か。」

「違います、店長。そういうことでは、 、 、 」

「まあまあ笑 二人とも本当に心配かけて申し訳ないです。明日からまたバイトに戻れるのでよろしくをお願いします。」

と、挨拶を済ませ帰宅する。

歩きながら、セイラにメールをしてみた。

「今学校？無事退院したよ。今から家に帰る所。 」

数分後、返事が来る。

「学校です。退院おめでとうございます。それで、いつにします？ 」
食事のことか。

「バイトが終わった後ならいつでもいいよ 」

「じゃあ、私明後日休みなので、どうですか？ 」

明後日か。問題なし。

「OK。じゃあ明後日に。バイトが終わったら、
迎えに行くよ 」

「&%\$#@(\$&#^\$(@*\$&&\$)@)」

ん？なんだこれ？何かの暗号化と思ったが、

「ちよ、壊れたか。 」

携帯の画面もおかしい。操作が効かなくなった。

「ったくなんだよ、こんな時に。 」

そう言って、電源を入れ直す。

すると何事もなかったかのように、携帯は元に戻った。

「あぶねー、焦った。 」

メールボックスを開くと、

「わかりました。また明後日。 」

というメールが届いていた。

3 幸と不幸

俺は家に着いた。

「ただいま。母さん。」

「おかえり。もうすぐ梨花も学校から帰ってくるから、帰ったらご飯にしましょう。」

そして俺はリビングに移動し、テレビをつける。

「あれ、母さんテレビ壊れた？」

「そんなことないと思うわよ。」
テレビが見つからない。ケーブルの接続に問題があると思い確認したが、そうでもないらしい。

「おかしいなあ。」

諦めて、部屋に戻った。
最近は70年代の洋ロックにはまっている。この時代の音楽は本当に心を落ち着かせてくれる。

そして、梨花と父さんが帰ってきた。

「ケンちゃん、ご飯よー。」

父が、いつもの様にテレビをつけようとした。

「父さん、なんかテレビ壊れてるよ。」

「何言ってるんだ？つくじゃないか。」
あれ？おかしいな。

まあ壊れてなくてよかった。

そして、いつも通り、父はテレビを見ながら、
母と梨花はおしゃべりをして、俺は黙って黙々と箸を進める。
食事中はいつもこんな感じだ。

そして風呂に入り、眠りにつこうとした時。
電話が鳴った。高松刑事さんからだった。

「もしもし、健人君。夜分遅くにすまない。」

「こんばんは。どうかしましたか？」

「実はあの後、色々調べてたんだが、道東金融は誘拐に関しては、何も知らないっていうんだ。特にそれらしい証拠も出なかった。」

それに、君の借金は全額返済されているそうだ。」

「え、いつの間に。」

「誰が返済したかはわからない。お金だけ事務所のポストに入っていたらしい。」

誰だろう。まさか母が勝手に？

いや、そんなはずはない。
病院でちゃんと納得してくれたはずだ。

「時系列を調べてみたんだが、借金が返済された後、君が誘拐された。つまり、彼らが君を誘拐するとは考えにくい。」

「そうですね。」

「何か思い出したことはあるかね？」

「いえ、今のところはまだ何も。」

「そうか、こちらも引き続き調べてみる。また何かあればいつでも連絡してくれ。」

「はい、わかりました。おやすみなさい。」

誰が借金を返済したのか、全くわからなかった。
なんか最近身の回りに変なことが起きすぎている。ダラダラフリーターを続けているバチが当たったのか。
その時はまだ、その程度にしか考えていなかった。

次の日、俺はバイトに向かった。
いつものように接客をこなしていく。

「DVD 3本で、300円になります。」

「500円お預かりします。」

ポチ、
あれ、、、
レジが開かない。

ポチ、再びボタンを押す。

それでも開かない。

「店长、レジが開かないです。」

「そんなわけないだろう。なんだ、開くじゃないか。」

あれ、、、

「お待たせいたしました。200円のお釣りになります。」

おかしい。なんだこれは。

「ちょっと、健人大丈夫か？」

「すいません。押しても開かなかったので。」

「そうじゃなくて、お前の顔真っ赤だぞ。熱でもあるんじゃないのか？」
と、額を触れられる。

ちょうど、竹盛が出勤してきた。

「ちーっす。先輩熱でもあるんですかー。」

「お前、すごい熱だぞ。やっぱりまだ働くのは早かったな。しっかり休んで、完全に直してから戻ってこい。その状態で、仕事をされる方が迷惑だ。」

言葉はきついが、店长なりの優しさだと感じた。

「はい。」

熱？なぜだろう。体調も悪くないし、普通に働ける。でも確かに、顔だけではなく腕も赤い。

「なんだこれ。」

ただの熱だろうか。

そう思いながら、家に帰り、母に心配され、とりあえず寝ることにした。

「明日はデートなのに。」

そう呟きながら、目が覚めたら治っていることを祈り、目を閉じた。

次の日、赤みは完全に消え、体調にも問題はなかった。

「そういえば今日休みって言ってたな。」

そして、セイラにメールをする。

「色々あって今日バイト休みになった。セイラも休みだったよね。」

返事が来る。

「はい。」

「今から会えない？」

「わかりました。」

よっしゃ。

「じゃあ今からそっち向かうね。」

「まだ起きたばかりだから、1時間後をお願いします。」

「了解」

そう返信し、俺も支度を始める。

今日は土曜日で、父も仕事が休みの為、車を借りて出かけることにした。

セイラの家の前に着き、電話をかける。数分後彼女が降りてきた。

「今日は車なんですね。」

「親の借りてきた。」

「どこいくんですか？」

「映画でも見に行かない？」

「はい。」

そして、映画館に向かう。

最近流行っているという恋愛ものの映画を見た。正直、俺にとってはあまり興味のない映画で、流行っている理由がわからなかった。しかし、彼女は隣で釘づけになってみている。やはり女の子はこういうのが好きなんだ。なんて思っているうちに映画は終わり。

「ふあ〜。楽しかったー」
背伸びをする彼女。

「そうだな。」

「健人さん本当に楽しかったですか？」
女の子は鋭いな。

「も〜。今度は、健人さんが見たい映画見ましょうね。」

「そんなことないよ。面白かったよ。ラストシーンとか感動したし。」
あんまり興味がないなんて、言えないよな。

「本当ですか？よかったー。」
ふう、危ない。

その後も遊園地に行ったり、軽くドライブしたり。THEデートを楽しんでいた。そして、夕食は近くのレストランを予約していた。あまりお金はないが、借金も無くなったし、少し奮発してみた。

「ここ、高くないですか？」

「まあまあ、もう予約しちやっしたし。」

お店の雰囲気は、本当に高級そのもので、シャンデリアなどが飾られている。

上品なウェイターさんに案内され、個室へ入る。

「個室って。普通でいいのに。」

「まあ、そんなに値段変わらなかったから。」

そう言いながら、向かい合って座った。

「メニューはすでに予約してある。飲み物だけ選んで。」

「じゃあ、赤ワインで。」

「じゃあ俺は麦茶を。」

「飲まないんですか？」

「今日車だから。」

「あ、そっか。私だけすいません。」

「大丈夫。気にしないで。」

その後、病院での詳しい出来事や、バイトの話、趣味の話など、いろいろ話した。

そして俺は、
いつもニコニコしてて、元気を与えてくれる。
そんな、太陽のような彼女に、気持ちを伝えたい。そう思っていた。

「健人さんって、将来の夢あるんですか？」

言おうか迷った。なぜだろう。その時、自分の夢を語るのが恥ずかしく思えてしまった。

でもまあ、いいか。

「昔は、起業を考えて、それで大学では経済学を学んでた。まあそんな夢も、いつの間にか消えていったけど。」

「いい夢ですね。消えちゃったなんて、もったいない。」

「そう言ってもらえるだけで、ありがたいよ。でも、簡単じゃないから、自分の会社を持つって。」

「簡単な夢なんてないですよ、健人さん。」
まっすぐ、綺麗な目で俺を見つめる。

セイラの中の純粋な気持ち、清楚さを感じると同時に、自分はセイラのようにまっすぐな心を持ってないんだろうなと、少し悲しかった。

「セイラは何か夢、あるの？」

「実は私の夢は、研究者として、新薬を開発することだったんです。治す事の出来ない病気を、私の薬で治せるようになったら嬉しいなって。でも、挫折しちゃって。だから、違う方法で人の役に立ちたいって思った時に、看護師になろうって決めました。」
なんていい子なんだろう。つくづくそう思わされた。

「ちょっと、トイレ行ってきます」
といて、彼女が席を立った。

なんとなく、携帯を見た。
まただ。
うまく動作しない。
電源を入れ直す。しかし、動かない。

するといきなり個室に、誰か入ってきた。

そう、あの白い部屋で見た男だ。

「久しぶりですね。北川様。」

「動くなよ。今警察呼ぶからな。」

「携帯、使えますか？」

くそ、何故知ってるんだ。

「お前一体何者だ。 」

「そう大声を出さないで下さい。 そうですね。 ジョーカーと呼んで頂けますか。 」

「目的はなんだ。 」

「あっ。 そういえば、 借金返済出来て良かったですね。 」

「なぜそれをお前が？まさか、 お前が・・・ 」

「ほんの感謝の気持ちです。 」

「お前に感謝される筋合いはねえぞ。 」

「ははは、 いずれわかりますよ。 では、 私はこの辺で。 」

「おい、 待てこの野郎。 」

カチャ、冷たい鉄の塊が、額に当てられた。

「それ以上動くと、撃っちゃうよ 」

不敵な笑みを浮かべるジョーカー。

目の前には、引き金があった。

こ・・・これは・・・銃か。

「くそツツツ！」

俺は一步も動けなかった。

いつの間にかジョーカーは、姿を消していた。

「健人さん、地面に座って何してるんですか？ 」

腰が抜けて、地面に座っていたようだ

「いや、別に 」

「変なの一。 」

「そろそろ帰ろうか 」

「健人さん、やっぱり様子おかしいですよ。 顔も真っ赤です。 熱でもあるんですか？ 」

体調に問題はない。しかし、さっきの男が気に仕方が無い。すぐに帰りたかった。

「ごめん、ちょっと熱っぽいかも。 また今度、ご飯食べに行こうね。 」

そうって、彼女を家まで送った。

本当は、帰りの車で、想いを伝えたかった。

でも今は、そんな余裕は無かった。

「健人さん、今日は御馳走様でした。

また連絡して下さいね。おやすみなさい。 」

「おやすみ。 」

彼女が、ビルの中に入るまで見送り、俺は車を走らせる。

頭の中は、さっきの男でいっぱいだった。

なんの目的で、俺に接触し、さらには借金まで返済したのか。

全くわからなかった。わからないことだらけで、だんだん腹が立ってきた。俺はアクセルを踏み、暗い夜道を駆け抜けた

。

家に着き、そのまま階段を登り、部屋に入る。

「もしもし、刑事さん。北川です。 」

「やあ、健人君。何か思い出した？ 」

「いえ、思い出したわけではないんですが、実は今日友達とご飯を食べていると、監禁された時に見た男が現れたんです。」

「なんだって！それで？ 」

「それで、借金を返済したのがそいつだってことがわかりました。その後銃を突きつけられて、逃げられました。」

「怪我は無い？ 」

「はい、大丈夫です。 」

「それは災難だったね。なんてお店？ 」

「プリンスホテルの2階にある、 Rainbowっていうレストランです。 」

「わかった。連絡くれてありがとう。調べてみる。 」

「お願いします。 」

電話を切り、落ち着こうと思い、音楽を聴こうとした。アプリを立ち上げ、再生ボタンを押す。

あれ？そういえば携帯が直っている。
壊れたり直ったり、よくわからない。
半年前に買い換えたばかりだが、もう壊れたのか。

すると、なぜか勝手にいろんなアプリが起動されるのだ。
「ちよ、なんだこれ 」

と思ったら、一気にアプリが消されていく。
それと同時に、自分の腕が赤くなっているのに気づいた。

「どういうことだ？ 」

コンコン
ドアがロックされた。

誰だろう？一瞬、嫌な予感がした。

「ケンちゃん。入るわよー。 」
なんだ、母ちゃんか。

「これから洗濯するから、今着てる服着替えて洗濯機に入れてね 」
「ああ、わかった。 」

そうやって、母はリビングへ戻って行った。

携帯の故障が気になって、仕方がなかった。

とりあえず着替えを済ませようと、服を脱ぐ。
そして、ポケットを触ると、何か入っている。
何か、紙のようだ。レシートか、と思って見ると。
Jと書かれた手紙だった。

中を見ると

「第一段階：脳の電子信号を操作出来るようになる。 」と書かれていた。

Jってまさか、さっきの男。

そうか、確かジョーカーと呼べと言っていたな。

なんだ、電子信号って。

まさか。そんなはずはない。

体への信号は脳がだし、それは電子信号として全身に伝えられるという話は聞いたことがある。
それを操作する？

つまり、俺の携帯が誤動作をしたのが、それに関係しているのか？

テレビがつかなかったのも、レジの異常も、そのせいなのか？

にわかには信じられなかった。しかし、俺の携帯を見ると、そう考えるほかなかった。

確かにそれだと、つじつまがあう。だが、そんなの不可能だ。まず、人間と電子機器の波長が合うはずがない。

「ちょっと、けんちゃん早くしてよー! 」

母の声が聞こえた。

とりあえず俺は服を着替え、洗濯機に服を入れる。

そして、洗濯機を閉めた瞬間、勝手に動き出した。

「ちょっと、けんちゃん。まだ洗剤入れてないんだから。 」

といって、母が中止を押す。

「ご・・・ごめん 」

部屋に戻り、冷静に考えてみた。

答えなんてわかるはずもないのに。

とりあえず、携帯を手に取り、右手に意識を集中させた。

すると、画面にいろいろな映像が映し出される。

なんだろうこれは。ぼやけていてよくわからない。

しかし、自分の意思で何かが表示されているのは間違いない。

なるほど。

これはさっきのデートの映像だ。自分の目線から見えていた景色が映し出されている。

鳥肌がたった。

ほ・・・本当に俺の脳と繋がっているのか。

他にもいろいろ操作してみた。

だんだん、コツをつかむと思い通りの操作ができるようになっていく。

携帯を持っているだけで、メール画面を開き、件名を指定し、メールを打てるようになっていく。

リビングへ向かい、リモコンを持つ。

持っただけで、テレビがつき、さらにチャンネルを変えられる。

なんだこの力は。

誰に相談するべきかわからなかった。

信じてもらえるとも思えないし、実際に力を見せたところで、恐れられるだけだ。

こんなの、病院でどうにかしてもらえる話でもないし。

そんな時頭に浮かんだのは、セイラの顔であった。

彼女なら信じてくれるはず。

「もしもし。 」

「セイラ? 」

「健人さん。もう私が恋しくなっちゃったの？」

ハハハと笑う、彼女。

「ちょっと今から会えないか？」

「いいですけど、さっき別れたばっかじゃないですか。」

「ちょっと話があるんだ。」

「わかりました。じゃあ、杉村公園で」

「ああ、すぐ行く。」

俺は走って向かった。

車を使いたかったが、この能力が未知数で、怖かった。

そして俺は公園に着いた。

夜の公園。風が冷たく、静まり返っている。この公園には遊具もなく、ただベンチと青い色に茂った芝生しかない。

すると、セイラが走ってきた。

「どうしたんですか？告白ですか？」

本当に告白だったら、どうするんだよ。と思いながらも、

「実は・・・」

なかなか一歩が踏み出せない。

馬鹿にされるかもしれない。

信じてくれなかったらどうしよう。

いろいろな不安がこの一瞬で押し寄せてきた。

「どうしたんですか？なんか今日おかしいですよ？それに、熱は大丈夫なんですか？」

「実はな、俺器械が自由に操れるんだ」

案の定笑われた。

「真剣な顔してるから何かなと思ったら。」

暗闇の中、笑い声が響き渡る。

「違うんだ、本当なんだ。」

といって、俺は自分の携帯を見せる。

そこには今日のデートの映像が映っていた。

「え、これってさっきの 」

彼女の表情が変わった。

「そう。さっきのデートの時の映像。視点は完全に俺の目からものだ。つまり、俺の脳とこの携帯が繋がっているということになる。」

「でも、そんな事って。 」

「普通考えられないよな。未だに俺でも信じがたい。 」

「健人さん、手が赤い 」

「そうなんだ。こうやって、何かとつながっているとき、体が赤くなってしまおうんだ。 」

「じゃあさっき顔が赤かったのって。 」

「ああ、俺もよくわからないが体が勝手に何かとつながっていたのかもしれない。 」
沈黙が走る。

「誰に相談すればいいの変わらなかった。誰に話しても信じてくれそうにないし。 」

「それで、私に？ 」

「セイラなら、力になってくれるかなって。 」

「嬉しいです。頼ってくれて。 」

にっこり笑ってこっちを見ている。

汗だくで、この状況を飲み込めず、焦っていたけど、この笑顔で少し落ち着くことが出来た。

「とりあえず、今は少しだけ自分でコントロールできるようになった。 」

とって、携帯を操作してみせる。

「あ、そうだ！ 」

何かを思い出したのだろうか。

「父の知り合いに、脳科学の先生がいます。その方に会ってみますか？ 」

脳科学の範囲内なのかはわからなかったが、何かがわかるかもしれないと思い、行くことにした。

「じゃあまた明日。先生には私から連絡しておきます。 」

「ありがとう。 」

そう言って俺はひとまず家に帰った。

4 電気信号

家に帰ると同時に、俺はすぐ部屋へ向かった。

どこまでできるんだろう。好奇心のようなものが湧き出てきた。

少し離れたところから、携帯に向かって意識を集中してみる。

だめだ。やはり、触れてないと操作できない。

パソコンを触り、腕に意識を集中させる。

パソコンが起動した。

さらに、意識を集中させる。

頭の中に、何か映像が飛び込んできた。

なんだろうこれは、数字ばかりだ。

おそらく、パソコンの中の映像が、俺の脳の中に入ってきたんだろう。

その後いろんな操作を試した。

正直、これは便利だ。あまり機械に詳しい訳ではない俺が、うまくコントロール出来るようになれば自分の好きなように操ることができる。

その後も俺は、寝ずに操作を続けた。

気付けば朝になっていた。

コンコン。

「母ちゃん。今日はバイト休・・・」

部屋を開けると、そこにはセイラが立っていた。

「上がらせてもらいます。」

そういつて、部屋に入ってきた。

「ちよ、俺が迎えに行く予定だったのに。」

「へえーここが、健人さんの部屋かー。ふつーー」

「なんだよ普通って。」

セイラがCDを手に取る。

「これこの前話してた70年代の洋ロックってやつですか？」

「うん。」

へえーと言いながら、

その後も、人の部屋をジロジロみていた。

「そんなに見るなって。恥ずかしいだろ。」

「別にいいじゃないですか。えっちな本でも隠してるんですか？」
なんか、出会った時よりもいい意味で、変わったな、セイラ。

「ちよ、そういうことじゃないだろ。」

「あっ、動揺してる。やっぱあるんだー。」
まったく、最近の若い子ときたら。

「こんな朝からパソコンで何してたんですか？」
と、パソコンの画面を覗き込む。

「これってまさか？」

「そう。色々試してたんだ。何ができるのかって。」

「これって、健人さんの大学のサーバーですか？」

「ああ、すんなり見ることができたよ。」

「これって犯罪ですよ、健人さん。」

「わかってる。試しただけだ。悪用はしない。」

「気をつけてくださいね。不正アクセスなんかで捕まっちゃったりしたら大変ですよ。」

「ああ。」

そして、パソコンを消し、脳科学者の先生のもとに向かう。
タクシーを拾い、港添大学へ向かう。

「その先生は有名な人なの？一応、昨日ちょっと調べたけど。」

「はい。その分野では一番権威のある人らしいですよ。なので、その人が知らなければ、おそらく日本人でわかる人はいないと思います。」

「そっか。」

そんなすごい人と知り合いなんて、社長令嬢はやっぱりすごいな。

脳科学研究室。ここか。

「次原さん。お久しぶりです。」

「おお、セイラちゃんよく来たね。 」

「初めまして。北川と申します。 」

「ホウ。君かね。私に相談があるという人は。 」

「はい、そうです。 」

「まあまあ、ここじゃなんだから。まずは中に入ってお茶でも。 」
イメージでは、大量の本や書類で散らかっていると思っていたが、以外とそうでは無く、綺麗な部屋だった。

「どうぞこちらに座ってください。 」

「はい、失礼します。 」

「セイラちゃん、お父さんとお母さんは元気かね? 」

「はい、お陰様で今でもバリバリ働いています。 」

「そうか、あんまり無理はするなと伝えておいてくれ。 」

「はい。わかりました。 」

「それで、北川君と言ったかな? 」

「はい。 」

「相談というのは何かね? 」

「相談というか、質問になっちゃうんですけど」

続けて、

「先生は、人間の脳が機械とつながることが可能だと思いますか? 」

なるほど、というような顔をした先生がゆっくりと話し始める。

~~〆~~
〆
~~〆~~
〆
べ物にならないくらい成長するであろう。」

「それで人類は進歩するのですか?
もしそうならば、人間は機械を思いのままに使えるようになる。そうならば、サイバー犯罪は後をたたなくなるでしょう。」

「確かに、その可能性もある。今では、サイバー攻撃が核を超える脅威とも言われているからね」

「なら、なぜその研究をそこまで追求するのでしょうか？研究者たちは、その脅威に向かって研究を続けていることになると思います。」

「それは違うよ、北川君。私はあくまで可能性の話をしているだけであって、その可能性だけを信じてしまい、進化の芽を紡いでしまうというのは、研究者としてあってはならないことなんだ。それに、この研究がうまくいけば、助かる人がどれだけいることか。

今までの進化の中で脅威と呼べるものはいくらでもある。拳銃や戦車が生まれた時も、もちろん核兵器もそうだ。しかし、我々人間は、その脅威にも恐れず、進化に怯むことはなく、その結果、今の時代があるのだ。まだまだ、平和とは言えない国もあるかもしれないが、昔戦争を当たり前のようにやっていた時代に比べれば、格段に平和になった。そう。進化が平和をもたらすのだ。だからね、北川君。変わることを恐れてはいけない。人間は、慣れる生き物なんだから。次の時代が来たら、その時代に慣れることが出来る。そうやって人間は、進化を続けてきたんだよ。」

俺は、釘付けになってその話を聞いていた。

「今はまだ、数十年後がどうなっているかはわからない。でももし、人間の脳とコンピュータが繋がるその時が来たら、私はその力を使って、この世界をより良くする。我々の研究は間違っていなかったと、この身をもって証明する。」

「具体的にはどうやって？」

「それは、まだわからない。ただ我々は、研究を続け、その過程の上で最良の選択をするまでだ。」

次原先生の、熱く語るその信念に俺は、希望という二文字が見えた。

帰りのタクシーの中で考えた。

近い将来俺のような人間が出てくることは、可能性としては十分に考えられるのだと。

その第一人者として、俺が選ばれたのかもしれない。

さっき、先生も言っていた。

「世界をよりよくする」と。

この力を利用して、自分が世界を変えることができるかもしれない。そんなことまで考えていた。

「健人さん、本当に先生に力のこと伝えなくてよかったんですか？」

「ああ、いいんだよ。それに、先生も言ってた。研究の過程の上で最良の選択をするって。あとは信じて、一番いい形で、世界に広がることを祈るしかない。そして俺は決めた。少しでも多くの人に、この力で幸せを掴んで欲しいって。だから、帰ってこれからどうするか、作戦を立てよう。」

「なんだよ、そんなに見つめるなよ。」

「今の健人さん、かっこよかったです。」

「なんだよ、急に。」

俺は必死に、照れを隠した。

家に着き、部屋に入る。

「それで、まず何をするんですか？」

「正直まだわからない。でもひとつ思ったことがある。自分の電気信号を、自在に操れるのであれば、相手がコンピュータでなくても、つまり、同じ電気信号を持つ人間であっても、つながることは可能なのではないかと。」

「つまり、テレパシーみたいなことですか？」

「そうだな。喋らなくてもお互いの意思を確認出来るということだ。手貸して。」

「嫌です。」

「なんでだよ。」

「だってもしそれが可能だったとして、もしかしたら私の考えてることが健人さんにばれちゃうってことですよね。」

「その可能性もあるな。」

「じゃあ嫌です。他の人で試してください。」

「なんだよ。そんなこと言ってる場合じゃないだろ。」

「そんなこと言ってる場合です。」

「全く、わかったよ。」

そして俺は、隣の梨花の部屋に向かった。

コンコン

「はい。」

ガチャ

「なんだ健人か。」

「なんだってなんだよ。」

「何の用？」

「ちょっと手貸して。」

「何、気持ち悪い。何する気？」

「いいから。」

嫌がりながらも、手を出す梨花。
そしてその手を握り、意識を集中させる。

「まだ？」

「ああ、もういいよ。ありがとう。邪魔したな。」

「え、何それだけ？」

「うん。助かったよ。」

「変な兄ちゃん。」

「カッコいい彼氏だな。」
そう言って俺は振り返り、部屋を出ようとした。

「え？」

「一緒に歩いてるの見かけてな。男には気をつけろよ。」

「健人だって男でしょ。」

本当は少し映像が見えた。
そして俺は自分の部屋に戻った。

「どうでした。」

「まだなんとも言えないな。少し映像は見えるが、感情まではわからない。」

「そっか。梨花ちゃんは何か言ってました？」

「いや、何も。多分あっちは何も感じ取ってないのかもしれない。」

「しょうがないな」
そう言って彼女は手を出した。

「私に何か伝えてください。」

「でも、こっちの気持ちは見ないでくださいね。」

そして俺は、彼女の右手を握り、意識を集中させた。

「わあ。すごい！なんか頭の中がふわ～ってなって、その後声が聞こえた。」

「なんて聞こえた？」

「声は聞こえるんだけど、なんて言ってるかはわからない。もう一度お願いします。」
再び意識を集中させる。

「ん～なんて言ってるかわからない。」
と言いながらも、恥ずかしがるセイラ。

もしかして、伝わってるんじゃないか。
「本当は聞こえてるんだろ、俺の声。」

「聞こえてないです。もう一度お願いします。」

「もう終わりだ。何度も言わずなよ。」

「へへへ」
そう言って、照れながら笑うセイラは可愛かった。

「とにかく。人間の間でもできるということがわかった。セイラの病院に、この力ですくえそうな患者さんはいないか？」

「そうだな～。あつ、いる。70歳くらいの老夫婦なんだけど、おじいちゃんの方が急に心筋梗塞で倒れちゃって、未だに意識を取り戻せてないの。そんな中、おばあちゃんは毎日通って、おじいちゃんが起きた時のためになって、毎日マッサージをしてくれて。でもね、このままだとおばあちゃんも倒れちゃうんじゃないかって心配してるの。」

「なるほどな。でも、意識のない人に伝えられるかどうかだな。」

「そうだね。でもやるだけやってみよう。おじいちゃんもおばあちゃんが待ってるって気付けば、もしかすれば意識を取り戻してくれるかもしれないから。」

「そうだな。」

「明日学校終わったらバイトだから、その時に。」

「わかった。これって、勝手にやって大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。きつとおばちゃんもわかってくれる。ちゃんと私が話しておくから。」

「わかった。じゃあ明日、3時頃病院に向かう。」

そうして、俺はセイラを家まで送り、帰り道、ふと公園に寄った。
そういえばこの公園だったっけ。
俺が倒れてたのって。

「お久しぶりです。北山様。 」

聞き覚えのある声でした。

「またあんたか。警察もあんたのこと探してるぞ。何が目的だ。 」

ジョーカーだった。

「目的？もうわかってるでしょ？ 」

「ふざけるな。いつも意味のわからないことばかり言いやがって。それに、俺が変な能力を手に入れたのも、お前にさらわれた後だ。一体俺に何をした！」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ。私は何もしていません。あなたの中に元々あった力が、大きくなっているだけですよ。」

「まあいい、この力利用させてもらうからな。 」

「もちろん、あなたがどうしてもが、あなたの勝手です。ただ、一つだけ忠告しておきます。あまりその能力に過信しすぎてしまうと、思わぬ被害が訪れると。」

「なんだよそれ。どういう意味だ。おい・・・ おいつ！」

ジョーカーはまた、暗闇に消えていった。

「ちくしょう。なんなんだ一体。どういう意味なんだ。 」

怒りを拳に握りしめ、俺は気持ちを抑えた。

5 さとばあちゃん

ピピピピピピ

ああ、もう朝か。

よく寝られなかった。どうしても、昨夜の事が忘れられなかった。

しかし今日俺はやらなければならないことがある。

急いで支度をしよう。

そして俺は、病院に向かって歩いていた。

その時、たまたま竹盛にあった。

「先輩、もう体は大丈夫なんですか？」

「おう、竹盛。もう大丈夫だ。」

「ならバイト戻ってきてくださいよ。ほんと最近つまないんすよー。休憩中も、店長の愚痴ばっか聞いてるんすよー」

「わかったわかった。近いうち戻るから。もう少しだけよろしく頼む。」

「わかりました。あ、それと最近セイラちゃんによく会ってるそうじゃないですか。コトちゃんが言っていましたよ。」

「最近色々あってな。それより、コトと付き合ってるの？」

「それが、告白したんですけど、フラれちゃいました。」

「そうか。その割には落ち込んでるようには見えないが。」

「最近、新しい恋が始まったんで。時代の流れは早いですよ、先輩」

「全く。お前ってやつは。」
何はともあれ、楽しそうではかった。

「じゃあ、俺はそろそろ。」

「どこ行くんですか、先輩？」

「ちよつと、病院にな。」

「まだどこか悪いんですか？」

「いや、そうじゃないけど」

「あ、わかった。セイラちゃんに会いに行くんだ。」
まあ、それも間違いではない

「ああ。」

「そっかー。いいなー。セイラちゃん可愛いもんなー。」

「じゃあな。」

「また。」

そして、竹盛と別れ、病院に着いた。
入り口を入ると、受付でセイラが待っていた。

「健人さん。こっち。」

私服の彼女もいいが、白衣の彼女にもまた違う魅力がある。

セイラに連れられ、老夫婦の病室へ向かう。
ドアを開けると、そこにはおじいさんを見つめているおばあさんの姿があった。

「さとばあちゃん。こちらが、さっきお話しした健人さん。」

「ほお。あなたが霊能者の健人君か。」

「霊能者？」

「ごめん、なんて言ったらわからなくて。」

まあ、その方がわかりやすいか。

「はい。北山健人と申します。」

「あなたは、本当におじいさんと会話ができるのかい？」

「現段階では、まだわかりません。おじいさんの意識がないので、実際にお話できるかはわかりませんが、やるだけやってみましょう。」

「そうかい。伝わる事を祈るかね。」

「それで、私はどうしたらいいんだい？」

「まずは、僕の右手を握ってください。」

そして、俺は左手でおじいさんの右手を握る。

「セイラちゃん。なるべく、この間は、他の人が病室に入ってこないようにしてもらえるかな？」

「わかりました。」

「では、さとばあちゃん。目をつぶって。そして、左手に集中して。」

さとばあちゃんが静かに目を瞑る。

「そして、おじいさんへ伝えたいことを頭の中で考えてみて。」

右手に、温かいものを感じる。

なんだろうこれは。

声が聞こえる。

さとばあちゃんの声だ。

「おじいさん。

聞こえますか。

聞こえていることを祈り、あなたに感謝の気持ちを伝えたいと思います。

あなたは今心筋梗塞で、病院に入院しています。急に倒れたので、今何が起きているかわからないと思いますが、ずっとそばにいたので安心して下さい。

おじいさん、長いことお眠りになられていますが、夢は見えていますか？

私は最近、いろんな夢を見ます。

忘れてしまった夢もあるけれど、ほとんどは覚えています。

綺麗な景色を見たり、お祭りに出かけたり、美味しいものを食べたり、時には大声で怒鳴る夢も見ます。でもね、どの夢にも必ずおじいさんがいるの。

それもそうよね。

二十歳の時に結婚して、それから50年間ずっとあなたのそばにいたんだもの。

私にはあなたとの記憶しかないの。

だから早く戻ってきて。そして、一緒に思い出を作りましょう。

まだまだ、行ってないところも食べてないものもたくさんあるの。

何もない中で時間を過ごすのは大変でしょう。

孫の顔も見たいでしょ？

本当に可愛いだよ。

この前なんて、おじいさんの似顔絵描いて、持ってきてくれたのよ。

元気になるないと、見れないんだから。

待ってますね。

さとより」

自然と涙が流れた。

果たしてこの思いは、おじいさんに伝わったのか。

たとえ伝わらなかったとしても、こんなに思ってもらっているおじいさんは、本当に幸せ者だなと感じた。

「さとばあちゃん。この気持ち、伝わるといいね。 」

「ええ。そう願いましょう。 」

そして、俺とセイラは病室を後にした。

「さとばあちゃん、なんて言ってたんですか？ 」

「さあな。 」

「隠さなくていいじゃないですか。 」

「まあまあ、今度ゆっくり話すよ。 」

「約束ですよ。あ、今日は早番なので、あと2時間で仕事あがるんですけど、よかつたら一緒に帰りませんか？」

帰っても暇だし、適当に時間潰すか。

「わかった。じゃあ終わったら連絡して。」

「はい。じゃあまた後で」

「おう。」

俺は、廊下の窓から景色を眺めていた。

さとばあちゃんは、どんな景色を見てきたんだろう。

そんなことを考えながら。

ブー、ブー。

大きな音になる。

「何の音だ？」

ブー、ブー。

看護師が慌ただしく、動いている。

緊急事態のようだ。

医者が病室へ入っていった。

おじいさんの部屋だ。

俺はそう思い、病室へと急いだ。

おじいさんの周りは看護師と、医者に囲まれており、必死に処置をしている。

数分後、おじいさんは担架に乗せられて、手術室へ運ばれた。

もちろんそこには、さとばあちゃんの姿もあった。

「ちょっと、セイラ、何があったんだよ。」

「私も詳しくはわかりませんが。でも、おじいさんの容態が急変したらしい。急いでるので、また後で。」

俺は自分を責めた。もしかして俺のせいなのではないか。

数時間後、僕らは霊安室にいた。

「さとばあちゃん。俺のせいだ。」

俺が、さとばあちゃんの気持ちを伝えることで、おじいさん、安心しちやっただのかもしれない。」

さとばあちゃんは優しく微笑みかけてくれた。

「そんなことないわよ。あなたがしてくれたことには、本当に感謝している。私たちのために思ってしてくれたことだもの。ありがとね。」

俺は涙が止まらなかった。

後悔や罪悪感以上に、さとばあちゃんの優しさに、気持ちを抑えることができなかった。

本当は一番、さとおばあちゃんが苦しいはずなのに。

俺はどうしても伝えたいことがあった。

「さとばあちゃん。実はね。」

さとばあちゃんが、俺を見つめる。

「俺がさとばあちゃんの気持ちを伝えた後、声がしたんだ。」

「それってもしかして、おじいさんの？」

「多分そうだと思う。何かいろいろな声が聞こえたけど、うまく聞き取れなかった。」

「そうかい。」

さとばあちゃんは悲しそうな表情を浮かべた。

「でもね、さとばあちゃん。一言だけはつきり聞こえたんだ。」

「ありがとう。って。」

ありがとうって言ってたんだ。

だからきっと、ちゃんと・・・さとばあちゃんの気持ちは伝わったと思う。」

そう伝えると、無理して笑みを浮かべていたさとばあちゃんも、我慢が出来なくなり、おじいさんの胸に顔を当て、泣き崩れた。

帰り道、俺とセイラはあまり会話をしなかった。というより、できなかった。

あんなことの後に、普通の会話ができるはずもない。

そして、いつのまにか彼女の家の前についていた。

「健人さん。今日はありがとうございました。さとばあちゃん、健人さんに本当に感謝していました。」

「ああ。少しでも力になれたならよかったよ。今度、おじいさんの墓参りに行こう。」

「そうですね。」

そして、俺は家に向かう途中、再びあの公園へ向かった。

もしかしたらまた、ジョーカーに会えるかもしれない。そう思って。

静まり返った、夜の公園。

虫の鳴き声だけが聞こえる。

「だから言ったじゃないですか。過信すると被害が訪れるって。 」
またこいつか。ジョーカーめ。だが、今日は大声で怒鳴る気力がない。

「こうなる事、知ってたのかよ。 」

「さあ、未来は全て、北川様が能力をどう使うかによって、変わってきます。 」

「お前は一体誰なんだ。悪人なのか、善人なのかわからない。 」

「私は善人です 」

「信じると思うか？お前は俺を誘拐した。善人がすることではない。 」

「でもあなたは、それと引き換えにその能力を手に入れた。借金も返済できた。どうして、悪人扱いするんですか？」

「それはそうだが、お前は俺に銃まで突きつけたんだぞ。 」

「まあ私はどう思われてもいいんですがね。 」

「とにかく、過去に私は、もう一つ大事なキーワードを言っていました、ちゃんと覚えていますか？ 」

「キーワード？なんだそれ。 」

「そうですか。忘れましたか。まあいいでしょう。いずれわかります。 」

「ちょ、なんだよ、教えろよ。おいっ！ 」

また消えた。

一体どんなカラクリで消えているのか知らないが、本当に不思議な奴だ。ただ、わかったことは、あいつに用があるときはこの公園に来ればいって事だ。

次の日から、俺はバイトに戻った。さすがに、フリーターがバイトすら休んでしまうと、ニートになってしまう。正当化になってしまうかもしれないが、フリーターとニートは違う。俺には働く意思がある。

ただ、人間偏差値の低い俺を雇ってくれる会社がないだけだ。

ただ正直、この能力を利用すれば就職どころか、夢だった起業という夢も叶えることができるのではないか。

いかんいかん。悪い顔になってしまった。

「店長おはようございます。 」

バイト先についた。

「おう、北山、来たか。」

「もう体調は万全なので、心配しないでください。ご迷惑をおかけしました。」

「体調良くなってよかったな。あと、竹盛にもお礼言っとけよ。お前がいない間、あいつ頑張ってくれたんだから。」

「わかりました。」

そうか、確かにあいつのおかげで休めてたんだもんな。

数時間後、学校を終え竹盛が出勤してきた。

「おおー。先輩。戻ったんすねー。よかったー。」

「おう、竹盛。昨日ぶりだな。
それと、長い事悪かったな。俺の分まで働いてくれてたらしいじゃん。」

「そんなことはいいんすよー。先輩が戻ってきてくれてよかったです。これでやっと楽しいバイト生活が戻ってきます。」

「竹盛。どういう意味かね？」

「ちよ、店長。盗み聞きとかタチ悪いですよ。」

「違う聞こえたんだ。」

「先輩からも何か言ってやってくださいよー。」

何はともあれ、とりあえず日常に戻ったって感じだな。

バイトが終わり、竹盛と飲みに行くことになった。

「女の子無しで、俺とサン飲みとは、珍しいな。」

「たまにはいいじゃないですかー。男同士で熱い話でもしましょうよ。」

「なんだよお前気持ち悪いな。まあでも、たまにはそれもありだな」
そんなことを話しながら、
近くの焼き鳥屋へ入った。

お互い生を注文し。乾杯をする。

そして話題はもちろん、

「先輩、セイラちゃんとはどうなんですか？」

まあ、予想はしていたが一発目からこの質問が来るとは。単純な男だな。

「まあ、うまくいってるよ。」

「くうー。いいなー。先輩達は付き合ってるんですか？」
そう言われると、正直わからない。

「さあ。」

「さあ。って！告ってないんすか？」

「ちゃんとした告白は、まだかな。」

「ちゃんとしてない告白なんて無いですよ。告白はしたかしてないかのどっちかなんですから。」

「うるせえな！お前はどうかんだよ。その、新しいことはうまくいってるのか？」

「そうっすね～」
焼き鳥を食べながら不敵な表情を浮かべる後輩。

「まあ、ぼちぼちですわ。 」

「なんだよそれ。まあまだフラれてないだけでも、大きな進歩だな。 」

「ひどいなーそれ。今度は大丈夫ですって。彼女も俺のこと好きっすもん。 」

「そうなのか？ 」

「多分。 」

「多分かよ。 」

と、まあいつも通りの会話をし、その後も特に熱い話をするわけでもなく、飲み続けた。

「先輩！せんぱ〜〜〜い。 」

「なんだよ、聞こえてるよ。 」

「二軒目行きましょうよ。二軒目〜〜〜！ 」

「わかったって、飲み過ぎだぞ。大きい声出すなよ。 」

そうして俺たちは、二軒目のBarへ向かった。
あり雑居ビルの螺旋階段を登り、3階へ。”Bar Kazu”という看板が目に入り、そこへ入る。

「へえ〜。おしやれなとこっすね。どうやって見つけたんですか？ 」

「まあ、知り合いの店なんだけど。 」
と言いながらドアを開け、カウンターに座った。
すると、奥の方から声が聞こえた。

「おっ、ケンちゃんじゃん。久しぶり。 」
そう言って現れたのは幼馴染のカズだった。

「おう、カズ。久しぶりだな。こいつ、バイトの後輩の竹盛。可愛がってくれよ。 」

「竹盛くんね。よろしく。 」

「よろしく願います。竹盛っす。 えっとー、 」

「ああ、俺は斧田和久。カズでいいよ。 」

「じゃあカズさんで。よろしくっす。 」

「どうしたの急に。俺の店来るなんて珍しいじゃん。 」

「竹盛がどうしても二件目行きたいっていうし、ちょうど近くにカズの店あるなーと思って。 」

「そうか。でも本当久しぶりだな。いつぶりだろう。 」

「多分1年くらい経つんじゃないか？最後に会った時、俺まだ大学生だったし。 」

「そうか。もう1年以上もたつのか。はやいなー 」

「だなー。 」

「ケンさんとカズさんってどういう関係なんですか？ 」

「ああ、俺らは幼馴染だよ。小学校から一緒に、よく一緒につるんでたんだよ。 」

「へえー。 」

「ケンちゃんは昔からよくモテてな、バレンタインなんて大変だったんだぞ。 」

「え、そうなんすか？でも確かに、今も可愛い彼女いますもん。」

「ほう。そうなのか。」

「お前も余計なこと言わないでいんだよ。それに、まだ彼女ではない。」

「なんだ、ケンちゃん。告白するのびびってんのか？」

「ちげーって、そんなんじゃないよ。まあいろいろ大人の事情ってもんがあんのよ。」

「なんだよそれ（笑）」

続けてカズが話し始める。

「まあでも確かに、もう俺ら大人なんだよな。昔は、若いってだけでなんでもできたけど、今はいろいろ守るものもできちまって。したいこともだんだんできなくなっていくんだよな。」

「なんだよ、カズ。お前らしくないな。」

「実はな、俺子ども出来たんだよ。」

「ええ！」

パリン。

驚いて、俺はコップを落としてしまった

「ちょ、先輩なにやってんすか。
カズさん、おめでとうございます。」

「おう、ありがとう。」

「マジかよ。もしかして、アリスとか？」

「ああ。」

「え、誰ですか？」

「アリスも幼馴染なんだ。」

「へえー。幼馴染同士の恋って憧れますよね。」

「なんだよ、結婚してたのか。なんで教えてくれなかったんだよ。」

「いや、まだ結婚はしてない。先に子どもできちゃってよ。」

「それで、アリスの親はなんて言ってるんだ？」

「母さんの方は、アリスがそれでいいならって言ってるけど、父さんの方はどうも。なかなか頑固なんだよな。」

「ああ、確かに。アリスの父さんは昔から厳しかったもんな。」

「ああ・・・。」

「どうした？」

「いや別に。」

一瞬、ケンが暗い表情をした。

「なんだよ、何かあるなら言ってくれよ。」

「いや、なんでもないよ。」

「そうか。それで今、同棲してんの？」

「ああ。」

「へえー。お前ももう父さんになるんだな。 」

「ちゃんと結婚式呼んでくれよな。久しぶりにアリスにも会いたいからよ。 」

「わかってる。 」

「お店の方はどうよ。儲かってる？ 」

「いやあ、正直ギリギリだな。見ての通り、あんまりお客さんこねえんだよな最近。 」

「こんなにお洒落なのになんでこないんすかねー。 」

「最近は景気が悪くて、財布の紐なかなか緩めてくれないからな。 」

「色々大変そうっすねー 」

「全く、適当な返事だなー。 」

~~お前~~ たろ。」

その後も、俺はカズと昔話で盛り上がり、竹盛も、お酒が進み、カラオケを大声で歌っている。

「じゃあ、カズ。俺らあと一杯飲んだら帰るわ。 」

「ええー先輩。もっと飲みましょうよー。 」

「まったく。お前は飲みすぎだ。明日学校だろ。家まで送ってくから。 」

「ええー」と言いながらソファに横になる竹盛。

「まったく。 」

「昔の俺らを思い出すぜ。 」

「もっとましだったろ。 」

「それもそうか 」

笑い声が響き渡る。

「じゃあまた来るわ。 」

「おう、いつでも待ってる。 」

「カズさん。僕のこと〜〜〜忘れないで〜〜〜 」

「まったく、お前は飲みすぎだって。じゃあな、また連絡する。 」
と、俺たちは階段を降り、タクシーを拾おうとしていた。

ふと、階段を見ると黒いスーツの男が3人、階段を上っている。

「こんな時間からカズの店に行くのか？ 」

「えっ、先輩。なんすかー 」

「なんでもねえ。ほら、タクシー来たぞ。 」

その後、タクシーで竹盛を家まで送り、俺も帰宅した。
次の日もバイトがあるので、帰って風呂にも入らず、横になった。
携帯にはメールが入っていた。
セイラからだった。

「今週の土曜日空いてますか？ 」

「バイトがある。でも5時には上がれるよ。 」

「日曜は？」

「日曜は休みだけど。」

「じゃあ、またどこか連れてってください。」

「わかった。プラン考えとく。」

「ありがとうございます。ではまた。」

「おやすみ。」

そして、目をつぶり、俺は眠りに落ちた。

6 誘拐計画

あれから数日が経った。

俺はいつもどおり、バイトだった。

「もう金曜日ですね、先輩。週末は何かするんですか？」

「明日はバイトだな。」

「日曜は？」

「一応、セイラと出かける。」

「ええーいいなー！俺もデートしたい。」

「例の子誘えばいいじゃん。ってか、名前何て言うんだよ。」

「ああ、ほのかですか？なかなか手強くて。」

「お前に手強い相手なんているんだな。」

「そりゃ、いますよー。」

「そういうのは意外に、勢いに任せてみるもんだぞ。」

「先輩、他人事過ぎますよー。これで振られたらどうするんですかー。」

「なんだよ、そんな余裕ブツこいてたら他の男に取られるぞ。」

「厳しいなー先輩。いずれはちゃんと告白しますって。」

「でもとりあえず、デート誘ってみたら？日曜は定休日だし、大学も休みだろ？」

「まあそうですけど。」

「はい、じゃあ電話！」

「え、今ですか？」

「もちろん。早くしないと先約入っちゃうよ。」

「でも・・・」

「いいから。早く！」

「わかりましたよー。 」

しぶしぶ、竹盛が電話をかける。

プルルルプルルル

どうやら電話に出たようだ。

「あの、今度の日曜だけどさ、よかったら食事でもどう？ 」

「うん」

「うん」

「そっか、わかった。 」

「じゃあ、またね。はい。 」

ガチャ。

顔が暗い、雲付きが怪しい。

だめだったのか。

「やったー！うまくいきましたよ。 」

急に満面の笑みを浮かべる竹盛。

「おお、よかったじゃん。 」

「いやー勇気出してよかった。先輩、ありがとうございます。 」

「まあ、お互い楽しもうや。 」

「はい。 」

そうこうしている間に、休憩が終わり。

バイトへ戻る。

バイト中、日曜日どこへ行こうか考えていた。

まあ、無難にドライブして、海でも行って、

帰りにご飯食べるって感じでいいか。

という結果になった。

そして、バイトが終わり、家に帰る。

すると電話が鳴る。

着信を見ると、カズからだった。

「カズ。どうした？ 」

ハア、ハア。

荒い息が聞こえてくる。

「ちょ、カズ？大丈夫か？ 」

「ケンちゃん。助けてくれ。 」

「どうした？何があった？」

「今ヤバイ奴らに追われてるんだ。とにかく、今からそっちいってもいいか？」

「ああ、もちろんだ。外で待ってる。」

「ああ。」

電話が切れた。

なんなんだ一体。

そして、俺は外でカズを待っていた。

すると通りの向こうから、辺りを見渡しながら、カズが走ってきた。

「おい、カズ。何なんだ一体。」

「とりあえず、家の中に入れてくれ。」

そう言って、ひとまず部屋の中に隠れた。

「あら、カズ君。久しぶりねー。どうしたのそんな慌てて。」

「お母さん、久しぶりです。ちょっと、急いで。失礼します。」

そう言って、俺とカズは急いで俺の部屋に入った。

「やべえんだ。」

カズの手が震えている。本当に怯えているのがわかった。

「どうした。カズ、落ち着け。何があった？」

「実はなケンちゃん。俺借金してんだ。」

そうか、昨日ケンが一瞬暗い顔をしたのは、そういうことだったのかもしれない。

「じゃあつまり、借金取りから逃げてるってことか？」

「ああ。でもあいつらただの借金取じゃねえんだ。」

「なんだよ。どういうことだよ。」

「道東金融ってしってるか？」

もちろん知ってる、俺が借金してたところだ。

「ああ。そこから借りてるのか？」

「そうなんだ、でもあいつら、俺がなかなか返済しないからって、俺を誘拐しようとしたんだ。」

まただ。俺の時もそうだった。

俺がなかなか返済しなかった時、誰かが俺を誘拐した。その後、あのジョーカーって男に出会ったんだ。

やっぱり、あいつはあの道東金融と繋がっていた可能性が高い。

「とりあえず、警察に連絡しよう。 」

「もうしたよ。でもあいつらまともに取り合ってくれない。結局は借金したやつが悪いんだよ。 」

「じゃあ、お前このままでいいのか? 」

「いいわけないだろ、アリスの身も危ないんだ。 」

「じゃあ警察に頼るしかないだろ。大丈夫、知り合いの人がいる 」

そう言って俺は、高松刑事に電話をかけた。

「もしもし、高松刑事ですか? 」

「ああ、北川君。 」

「実は今、俺の幼馴染が道東金融の奴らに追われてるんです。 」

「なんだって。 」

「それで、こいつ誘拐されそうになって。 」

「それは危険だ、すぐそっちに向かう。今どこにいる? 」

「今俺の部屋で隠れてます。 」

数十分後、刑事さんがうちに着いた。

「どういうことなんだ? 」

「こいつが、幼馴染のケンです。 」

ケンが軽く会釈をする。

「こいつも道東金融に借金をしていて、なかなか返済しないもんだからって、誘拐されそうになったんです。つまり、ジョーカーと、道東金融はやっぱり繋がってると思うんです。これ、俺の時と全く同じシチュエーションなんです。」

「なるほど。それで、道東金融の奴らは今何処に? 」

「カズ、知ってるか? 」

「すみません。わかりません。杉寺駅の近くの路地裏を歩いていたら奴らがやってきて、そのまま抵抗して走ってここまで逃げてきました。」

「とりあえず応援を呼んでみる。落ち着くまでは、ここで待機しておいてくれ。 」

「はい。」

そう言って高松刑事は家を出た。

ドアを開けると家族が心配そうに、部屋の外で待っていた。

「ケンちゃん。何かあったの？」

「ごめん、みんな。ちゃんと後で説明するから。ちょっとカズがトラブルに巻き込まれちゃって。」

「そうか、健人。気をつけるんだぞ。」

「ああ、父ちゃん。わかってる。」

扉を閉め、カズを見た。少しは落ち着いたようだ。

「とりあえず、なんか食うか？」

「ああ。」

俺は部屋にあった、カップラーメンの封を開け、お湯を沸かした。

「実はな、カズ。俺も借金してたんだ。」

「さっき、刑事さんに話してたな。」

「というよりも、友達の代理人になっちまってよ。その友達が飛んじやって。それで結局、その負担が俺に回ってきたってわけ。」

「昔から、お前そういうところあるよな。友達思いついていうか、お人好しっていうか。」

「はは。そうだな。それで、借金をしてたのがカズと同じ道東金融なんだ。」

「そうなのか。」

カズの顔つきが変わった。

「ああ、それで俺は誘拐された。」

「えっ。」

カズは驚いた表情を浮かべる。

「だ、、、大丈夫だったのか。」

「いや、よくわからない白い部屋に連れて行かれて、」

「白い部屋？」

「ああ、全く何もなただの部屋だ。 」

「それで、どうなった？ 」

「どうもしない。その後スーツを着た黒髪の男が現れた。ジョーカーって奴だ。そして、俺は意識を失い。数日後、目が覚めた時には病院のベットの上だった。 」

「それで、結局何もされなかったのかよ。 」

「いや、実はな・・・ 」

ボタン。

ドアの開く音がする。

「大変だ、カズくん。 」

高松刑事が戻ってきた。

「どうしたんですか？ 」

カズが立ち上がる。

「実は、道東金融の奴らが君の家に向かっているそうだ。 」
かズの顔が一瞬固まる。

「ま・・・まずい。家にはアリスしかいない。 」

「カズくん、急いで向かおう。 」

「はい。 」

「でもお前、あいつらに捕まったら・・・ 」

「なんだよ、つかまったらどうなるってんだ。 」

「そ・・・それは 」

「二人とも早く。急いで。 」

俺は答えられなかった。どうなったか、すぐに言うことができなかった。

俺たちは急いで、刑事さんの車に乗り込んで、カズの家に向かった。

車を降り、辺りを見渡すが、まだ奴らは来ていないようだ。カズが急いでドアの鍵を開ける。

「アリス！アリスいるか？ 」

「はい。カズ帰ったのね。おかえり。 」

「よかった。 」

そう言って、アリスを抱きしめる。

「ちょっと、どうしたの？ 」

「あれ？お客さん？あら、ケンちゃんじゃん。久しぶり 」

「おう、アリス久しぶりだな。 」

アリスのお腹には確かに、赤ちゃんがいた。

「それで、隣の方は？ 」

「警視庁の高松と申します。 」

「え、刑事さん？どうして刑事さんがうちに？ 」

「すまん、アリス。話すと長くなるんだ。とりあえず今はここから逃げよう。 」

「え、ちょっと。どういうこと？ 」

アリスの腕を引っ張り、カズが外に出ようとする。

しかし、外にはすでに道東金融の車が止まっていた。

「くそ、あいつらもう来てる。 」

「カズ君、裏口はないのか？ 」

「庭に出る窓があります。 」

「そうか、そこから逃げよう。 」

「刑事さん、応援はまだですか？ 」

あまりにも遅かった。

「もう直ぐ来るはずだ。とにかく今は、逃げるしかない。あいつらは銃を持っている可能性が高い。危険すぎる。」

裏の庭に出て、塀を登る。アリスは赤ちゃんもいるため、登るのに苦戦していたが、カズが手を貸しなんとか登り切る。

そして、みんなで大通りへ向かい走る。

すると、後ろの方から、スーツを着た男たちが追いかけてきた。

「くっそ、あいつら、もう来やがった。 」

カズが叫ぶ。

「みんなこっちだ。」

刑事さんが先頭を切り、みんなを誘導する。

とにかくみんな必死で走り、なにやら異様な雰囲気を持つ建物に隠れた。

「みんな無事かい？」

みんなが返事をする。

「ここって？」

アリスが不安そうに尋ねた。

「多分ホテルだと思う。」

「ホテルってこんな感じだっけ？ケンちゃん。」

「おい、カズ大体わかるだろ。ラブホだよ。」

「なるほど、それでこんなエロい雰囲気なのか。」

「そんなこと言ってる場合かよ。」

「仕方がない。とりあえず、今日はここに泊まろう。」

みんなの視線が高松刑事に集まる。

「え、ここに？」

「仕方がないだろ、今外に出るのは危険すぎる。」

確かにそうだ。危険すぎる。

あいつら、手に何かを持っていた。多分拳銃だろう。

男3人に妊婦が1人。異様な光景だが仕方がない。今日はここに泊まろう。

そして俺らは、部屋に入り、作戦を考える。

「刑事さん、警察の応援はどうなっているんですか。」

「正直ちゃんと動いてくれそうにない。実際に道東金融の奴らをもっと大きく動けば話は別だが、そういうわけでもない。ただあいつらは俺たちを追いかけているだけだ。それに、カズくんの誘拐も未遂に終わっている。だから、証拠がないんだ。」

「でもあいつら拳銃持ってました。」

「ちょ、ケンちゃん、本当か？」

カズが驚く。

「ああ、はっきりとは見えなかったが、手に何かを持っていた。あの形状からして拳銃で間違い無いと思う。」

「とりあえず、今はここから逃げる方法を考えよう。」

「ねえ、何の話してるのかさっぱりわからないんだけど。」
と、アリスが少し苛立っている。

「ごめん、アリス。実はな、」
そういつて、カズがこれまでの経緯を説明し始めた。

「え、カズ。借金があるの？」

「ああ、今まで黙っててごめん。」

「どのくらい？」

「それは・・・」

「はっきり言ってよ。今更隠したところで意味ないでしょ!!!」

「500万。」

「500万!？」
ついつい俺も大きな声を出してしまった。

「カズ、なんでそんなに借りたんだよ。」

「経営が苦しくて、お前も店に来てわかっただろ。ここんどこ客足が全然なくて、自分の店を保つために仕方なかったんだ。きっと、もう少しすれば、景気が良くなって、客足も増えると思った。だから、それまでなんとかして、店を守りたかった。」

「もしかして、昨日俺達が店を出た後に、来たスーツの奴らって。」

「ああ、道東金融の奴らだ。」

「やっぱりそうだったか。その時はなんて言われたんだ。」

「いつものように利子だけでも払えって。」

そんであいつら、アリスの名前まで出して、脅してきたんだ。」

「刑事さん。これって犯罪ですよ。」

「ああ、立派な恐喝罪だ。おそらく、あの金融会社は利子も法外な量を取り立てているに違いない。しかしまだ、立証となると難しいだろう。」

「くっそ。どうすればいいんだ。」

カズが怒鳴る。

「落ち着けてカズ。ここで怒鳴ってもしょうがないだろ。とりあえず、最善の策を考えよう。」

そうだ。あの公園に行けば、あのおっさんに会えるかもしれない。

だが、こんな状況で現れるのか。

だからといって、ここでぐずぐずしているわけにはいかない。

「少し様子見てきます。」

「ちょっと、お前それは危険だろ。」

「そうだよ、ケンちゃん。それは危険すぎる。」

刑事さんが俺の腕をつかむ。

「その通りだ、健人君。それは危険すぎる。」

「刑事さん、カズ、アリス。大丈夫。あいつらが狙っているのは、カズとアリスだ。」

「でも健人君。あいつらは君の姿も見ているかもしれない。」

「刑事さん。俺は大丈夫です。それに仮に捕まったとして、俺は一度誘拐されてます。この状況からして、俺を誘拐したのはあいつらである可能性は高いと思います。なので、再び俺が誘拐される可能性は極めて低いはず。」

「え、そうなの？」

とアリスが驚く。

「カズ、後でアリスにも説明しておいてれ。」

「ああ。」

「刑事さん。何かあったらすぐに連絡しますから。」

そういつて、刑事さんの腕を振りほどき、俺はわずかな可能性をかけて、あの公園へ向かった。

「おい！いるのか、ジョーカー！」

返事がない。

「くそ。いないのか。」

「あら、今日は気性がいつもより荒いですね。」

「テメエ。カズを誘拐して何をするつもりだ。」

「え？何の話ですか？」

「とぼけるな！俺と同じ目に合わせようとしているんだろ。お前が道東金融と繋がっているという事はわかっている。」

「あら、ばれちゃいましたか。 」

「そりゃそうだ。俺が誘拐された後、見たのはお前だけだった。 」

「目的を言え、お前とあいつらはどういう関係なんだ。 」

「わかりました。少しだけ教えてあげますから。そんなに怒らないでください。 」

そして、ジョーカーは続けた。

「実は私はある研究をしています。その研究で開発された新薬を実験体へ投与し、その後の経過を観察するのです。」

あの時言っていた実験体とは、そういうことか。

「私は、その実験体を道東金融から買っているのです。 」

「ふざけるな。そんなことが許されると思っているのか。 」

「どうせあなた方は、借金をして返済もできない、いわばクズじゃないですか。 」

くそ、今すぐこいつをぶん殴ってやりたい。

「だから、そんなあなた方を少しでも進化させてあげようという、いわば慈善事業のようなものです。」

「慈善事業だと。ふざけるな。その慈善事業とやらで、どれだけの人間を犠牲にしてきたんだ。 」

「研究に失敗は付き物です。ただ、これ以上は企業秘密ですので。でもよかったじゃないですか。北山様の実験はうまくいきました。今も元気に生きてらっしゃる。」

それで、次はカズが実験体ってわけか。

ふざけやがって。

「ちなみに、刻山様の件ですが・・・ 」

「刻山？龍一の事か？ 」

「何か聞いてませんか？ 」

「いや、知らない。あいつがどうしたっていうんだ。 」

「なんだ、何も聞いてないんですね。彼があなたを売ったんです。友達って、すぐ裏切っちゃうんですね。」

「ど・・・どういうことだよ。あいつが裏切っただと？ 」

「はい。実は彼の借金は数千万円にまで膨らんでいました。経営が苦しかったのでしょう。毎月毎月、借金が膨れ上がっていきました。そんな時私達は、刻山様では無く、あなたの体に目をつけたのです。あなたは、フリーターで社会貢献をしたことがない。そういうクズが一番実験体としてはふさわしいのです。」

言いたい事言いやがってこの野郎。

「それにあなたはまだ若い。実験が成功する可能性が格段に上昇する。そう判断し、私はあなたに借金を押し付けられるよう道東金融を説得した。刻山様には、借金を帳消しにする代わりに、身をくらし、借金をあなたに押し付けるという約束をさせて頂きました。」

「な・・・なんだと。あいつがそんな事を。」

「それに、借金数千万円をいきなり押し付けられるとあなたが逃げたり、自殺する可能性もあった。だから、あえてあなたの価値に見合った、50万円とさせて頂きました。」

「と、まあそんな感じです。」

「いい加減にしろよ。こんな事これ以上続けられると思うなよ。」

俺はジョーカーに殴りかかろうとした。

しかし、俺のパンチは当たらない。

すばしっこいやつだ。

「ちょっと、北山様。落ち着いてください。」

「ふざけるな。カズは絶対に渡さねえからな。」

「いいんですか？彼には500万円の借金がある。私と道東金融の契約内容は、その人の借金の金額でその人を買収するというものです。つまり、斧田様の実験がうまくいき、北川様と同じようになれば、借金は無くなる。そうなれば、彼も喜ぶと思うんですがねえ。」

「失敗する可能性もあるんだろ。そんな危険な場所にカズを連れて行けるかよ。」

「わかりましたよ北川様。今回斧田様に関しては諦めます。彼には子供が出来たそうですね。綺麗な奥さんまでいるそうじゃないですか。」

「てめえ、どうやってそれを。」

「そういう人は、実験体としてふさわしくない。実験体は一度、死ななければならない。脳を改造しちゃいますからね。生命力の強い人程、成功しにくいんです。なので今回は諦めます。斧田様にも返済頑張ってください。とお伝えください。では、失礼。」

「おい、待て！おい！」

くそ、なんなんだ一体。

まあでもこれで、あいつは助かるはずだ。

急いで、ホテルへ戻ろう。

プルルルル、プルルルル

電話だ。

「もしもし」

「あ、健人さん。セイラです。あの、明日の件なんですけど、」

そうだった。明日はセイラとデートの約束があったんだ。

「ごめん、セイラ。明日デート行けそうにない。」

「何かありました？今まだ外にいるんですか？」

「ああ、ちょっとトラブルに巻き込まれてな。」

「大丈夫ですか？」

「ああ、とにかく今急いでるから、また落ち着いたら連絡する。」

「わかりました。」

「じゃあな。」

そう言って電話を切った。

とにかく、今は急いでホテルへ戻ろう。

「ケンちゃん。大丈夫だったか？」

どうやらみんな何事もなかったようだ。

「ああ。」

「それで健人くん、何かわかったかね？」

「はい。」

そして俺は、さっきの出来事について話し始めた。あの公園で、ジョーカーに会った事。

ジョーカーと道東金融の関係。そして、カズはもう安全だという事。ただ、自分の能力については話さなかった。

「そうか。俺はアリスとこの子に助けられたのか。」

高松刑事の様子がおかしい。それもそうか、この話を聞いて冷静でいられるわけがない。

「実験体だと。ふざけるな！あいつら人間をなんだと思ってやがる。」

高松刑事のこんな表情は見たことない。

「とにかく、今日はここで休んで、明日家に帰ろう。」

「そうですね。」

そして、カズとアリスがベッドで、俺はソファ、高松刑事は、床にシーツを敷いて寝る事にした。

よし、電気を消すか。

そう思って立ち上がり、スイッチを切ろうとした時、カズが言った。

「俺決めたよ。」

「えっ？」

「店売るよ。それで、借金を返済する。」

「カズいいの？あの店はカズの夢だったじゃん。」

アリスが心配そうに尋ねる。

「ああ、いいんだ。あの店はまだ高く売れる。500万円返しても、きっとお釣りは来る。だから、残ったお金で新しくやり直そう。この子が産まれるまでには、ちゃんと仕事見つけて、それでいつか、アリスのお父さんにも認めてもらう。そしたら、式挙げような。」

「うん。ありがとう、カズ」

アリスの目は涙で溢れていた。

「ケンちゃん、ありがとな。危うく俺、危ない目にあうところだったな。」

「いいって、そんなの。当たり前だろ。」

電気を切り、暗闇の中4人は静かに眠りについた。

7 狩りの始まり

翌朝になり、俺達は高松刑事の車も停めてあるので、とりあえずケンの家へ向かった。

車はそのまま止められてあった。だが、家の窓ガラスが割れている。

みんなで急いで中に入ると、そこは酷く荒されており、物が散乱した状態だった。

「なんだこれは。」

「道東金融の奴らだな。金目の物は全部持って行かれた。」

「くそ。俺がもっと早く話をつけていれば。」

「そんなことない。ケンちゃん。」

「そうだよ。ケンちゃんのせいじゃない。」

「もういいんだ。そもそも借金をした俺が悪いんだ。」
そう言ってみんなに笑いかけるカズ。

「カズ・・・無理して笑うなよ。」

「しょうがないだろ。笑ってごまかすしかない。」
沈黙が続いた。気まずい空気だ。

カズが沈黙を破った。

「でも、ケンちゃん。本当に大丈夫だ。一番大事なものを、それはアリスとこの子だ。この二人に何もなかっただけ、俺は幸せだ。」

「カズ・・・」
アリスが真っ直ぐカズを見つめる。

「そうだな。」
そして、俺とカズは片付けを始め、アリスはご飯を作ってくれた。
高松刑事は、署へ戻り、報告書を書きに行くそうなので、お礼を言って、その場で別れ車で去って行った。

「でもあれだな、3人で会うのも久しぶりだな。」
カズが嬉しそうに話す。

「ああ、アリスと俺は高校卒業の時以来だから、かれこれ5年ぶりになるな。」

「え、ケンちゃんと最後にあったのってそんな前だけ？」

「ああ、高校の卒業式。カズがお前に告白しただろ？その後、何故かお前ら二人の2ショット写真取らされて。」

「そうだったな。懐かしい。」

「それで、その後カズとアリスは二人でデート。俺は一人で帰ったんだよ。」

「そうだっけ？」

「まったく。そうだよ。俺だけ残していきやがって。」

「わりいわりい。」

「だから、アリスに会ったのはその時が最後だ。」

「そっかー。私達も年取ったねー。あれからもう5年かー」

「そうだな。アリスも5年でだいぶ変わったな。」

「ケンちゃん、それどういう意味？」

「変な意味じゃないよ。でも子供生まれたら、もっと怖くなるんだろうな」

「ケンちゃん。それ俺も心配」

「ちょっと、あんた達！」

まだ、めちゃくちゃで、破片だらけだったその家は、笑いに包まれ、少しだけ暖かさを取り戻した。

数分後。

「はい。出来たわよ。」

アリスがテーブルにご飯を運んでいる。

「ふう、一旦ここで休憩するか。」

「そうだな。」

そして、俺とカズは手を洗い、テーブルに座った。

「でたっ。オムライス。」

「アリスといえば、オムライスだよな。」

「中学の時、アリスの家に遊びに行ったら、必ずオムライスだったよ。俺らは、アリスの母ちゃんの手料理が食べたかったのに」

アリスが俺らを睨む。

「ちよ、俺らって。ケンちゃん俺まで巻き込むなよ。俺は、あれだぞ。その・・・アリスの料理楽しみだったぞ。」

「ほんとかな～」

「本当だって。」

やっぱりこの3人でいる時が、一番好きかもしれない。

昔を思い出せるというか、何も考えずに気を楽しんでいられる。

「あ、そういえばアリスの父さんってどこで働いてるんだっけ？」

「永田 出版だけど、どうして？」

「そっか、なんとなく」

「なんとなくで聞く？普通。」

「ごめんごめん。んで、どうやって認めてもらうんだよ、カズ。」

「そうだな。まずは借金をなくさないとな。それで、新しい仕事が決まったら、また挨拶しに行くよ。」

「そうか。」

「ああ」

「頑張れよ。」

「サンキュ。」

「じゃあ俺はこの辺で。」

「え、帰るのか？」

「ああ、俺にも今大事な人がいるんだ。今日本当はその子と約束があつて。」

「前に竹盛が言ってた例の女の子？」

「ああ。最後まで片付け手伝えなくてごめんな。」

「いや、十分だよ。あとは俺がやるから。」

「ケンちゃんありがとね。またいつでも遊びに来てね。オムライスならいつでも作ってあげるから。」

「オムライスだけかよ！まあ、ありがとな。また来るよ。必ず。」

「じゃあな」

そう言って、俺は斧田家を出て、彼女に電話した。

「ごめん。とりあえず今落ち着いたよ。もう予定入れちゃった？」

「ごめんなさい。友達と約束しちゃって。」

そうか。それは仕方がない。

「わかった。今日は本当にごめんね。また連絡する。」

「わかりました。連絡待ってます。」

カズの家戻って、片付けを手伝おうかと思ったが、もっといい事を思いついた。

そして、俺はタクシーを拾いある場所へ向かったのだ。

「いかなさいましたか？」

「あ、あの一ノ瀬さんいらっしゃいますか？」

「下の名前はを伺ってもよろしいですか？弊社には一ノ瀬という妙ぞの方が3人いらっしゃいますので。」

下の名前か。さすがにわからないな。

「たしか、広報部の方だと思うのですが。」

「広報部の一ノ瀬さんですね。かしこまりました。少々お待ちください。」

プルルルプルルル

「こちら受付ですが、一ノ瀬さんいらっしゃいますか？」

「はい」

「かしこまりました。」

受付嬢の方がこっちをみる

「あの、お名前伺ってもよろしいですか？」

素直に名乗っていいものなのか。

俺のことを覚えているとは思えない。

まあ嘘をつくわけにもいかないし。

「北川健人です。」

「北川健人様がいらっしゃっています・・・ はい。かしこまりました。失礼いたします。」

「あちらの席でお待ち頂けますか？」

「はい。ありがとうございます。」

俺のこと覚えてないだろうな。

そんな不安を抱きながら待つ事5分。

エレベーターから一人の男性が置いてきた。

「一ノ瀬さんですか？」

「はい、どうも。北山健人さん？」

「はい。あの、自分アリスの幼馴染で昔よくお家にお邪魔させて頂いてたのですが、覚えてないですか？」

「ああ、北山くんね。覚えてるよ。大きくなったねー。」

「あ、よかった。もう覚えてないかと思いました。」

「いやいや、そんなことはないよ。君たちは本当に元気で、いつもうちで騒いでたからよく覚えてるよ。」

「ははは。お騒がせしました。」

「それで、今日はどうしたの？」

「実は、アリスと和久の事なんですけど。あからさまに顔が曇ったのがわかった。」

「関係のない俺が言うのもなんですが、あいつらは本当に愛し合っています。お父さんは、借金の事にお気づきだと聞きました。今、和久はその問題に真剣に向かい合って、解決に近づいています。アリスも妊娠して、今まで以上に二人で力を合わなければいけない時期だと思うんです。だからこそ、彼らの結婚を認めてほしい。」

関係ないだろ。そう怒られるかと思った。

「ありがとうね、北川君。私も実はわかっているんだ。早く認めなければならないということ。でも、娘を預ける親の気持ちをわかってくれ。」

「そうですね。口出ししてすみませんでした。ただ、これだけは伝えたいんです。」

そういつて、俺は手を伸ばす。

「俺の手を握っていただけませんか？」

「え？」

「俺の手を握って、目をつぶりその手に意識を集中させてください。お父さんは言われるがままに、俺の手を握り、目をつぶった。」

タクシーを拾い、俺は家に帰ろうとした。

後ろからアリスのお父さんが追いかけてきた。

「北川君。君がどんなカラクリを使ったのかはわからないが、君の気持ちは伝わったよ。アリスも和久も、本当にいい幼馴染を持ったもんだ。」

「いえいえ、こちらこそ彼らには助けられてばかりです。 」

「いつになるかはわからないが、結婚式には是非参加してくれ。 」

「はい。楽しみにしています。では、失礼します。 」
そう言って俺は、タクシーに乗り込んだ。

次の日、俺はバイトに向かった。

「店長、おはようございます。 」

「はい、おはようさん。今日もよろしくね 」

「はい。 」

午後になると、大学を終えた竹盛が出勤してきた。

「先輩！昨日最高でしたよ。 」

「昨日？」

「ほのちゃんとのデートですよ、デート。 」

「ああ、よかったな。 」

「なんですかその薄い反応は。先輩はどうだったんですか？ 」

「できなかった。 」

「え、なんですか？フラれたんですか？ 」

「違うよ。まだ付き合ってもないよ。大人にはいろいろあるんだよ。 」

「でたー。またそうやって逃げるんだからー。 」

それからというもの、いつも通りの毎日を過ごした。

平凡な毎日。これほど幸せな事は無い。

ただ少しか、体に違和感がある。俺は小さい頃、左腕に大きなやけどを負った。まだ、物心のつく前だ。20年以上その傷と共に生きてきた。最近その傷が、いつの間になくなっていった。

俺の体の中で、また何か動き出しているのだろうか。

気になって、いつもの公園に行ったが、ジョーカーが出てくる事は無かった。

あの事件以降、道東金融の数人が逮捕され、ジョーカーは指名手配される事になった。

道東金融を自宅捜査した際に、実験体などの、人身売買に関する資料が出てきたのだ。

ひとまず、当分は静かな日々を過ごせるな。

何か変わった点といえば、毎週日曜日には病院に通うようになった。

さとばあちゃんの時のように、他にも困っている人は山程いる。

意識がなくても、相手に想いを伝えられるのは俺しかない。いつの間にか、そんな使命感や正義感を持つようになっていた。

そして、そんな毎日を過ごしていたある日、

一軒の電話が入ったのだ。

高松刑事からだった。

「高松刑事、もしかして誰か捕まったんですか？」

「健人くん、久しぶり。いや、そういうわけではないんだが。」

「どうかしました？」

「以前君が言ったことをふと思い出してね。君は一度実験体として、奴らに売買された。その時、君の身に何かされたと思うんだ。それで、もしよかったら一度検査を受けてみないか？」

そうか、俺の能力のことってないんだっけ。

「いや、特に変わったところもないので。」

検査でわかるわけがないと思い、いくつもりはなかった。

「そうか。もし何か異変を感じたら、いつでも言ってくれ。」

「はい。事件の方はどうですか？」

ジョーカーは現れましたか？」

「いや、全くだ。君が言っていた例の公園もよく調べたが、なかなか見つからない。道東金融の幹部達も、今は海外に身を隠しているとの噂もある。」

「そうですか。」

「でも心配するな。必ずや捕まえてみせる。」

「はい。ありがとうございます。」

そして、電話を切り、俺は考えた。

犯罪だが、やるだけやってみよう。

そう言って、パソコンを開く。

最近は、慣れもあってか、そこまで腕が赤くならなくなった。

まずは、道東金融の奴らが使ってたパソコンを探し出し、情報を盗もう。

右手に集中する。

くそ。

さすがにだめだ。見つからない。

そんな簡単ではないか。

実際に奴らのパソコンを手に入れられれば。

そうか。警察が押収したかもしれない。

でも、それはすでに調べられているはず。

今更、そのパソコンから新しい情報を得られるとは思えない。

やるだけやってみるか。

「高松刑事、何度もすみません。 」

「どうした？ 」

「道東金融の家宅捜索の時、何か応酬しました？ 」

「そうだな。人身売買に関する書類、法外貸付に関する書類、それと彼らのパソコンだ。 」

「それで、そのパソコンはまだ署内にあんですか？」

「確かまだあったと思うが。」

「そのパソコンは全て調べたんですか？」

「ああ、一応な。でも既に情報は削除されていて、そこから得られる情報は特になかった。」

「そうですか。」

「それがどうした？」

「一度見せていただきたいと思います。」

「そうだな。所内の人間しかみれないが、君なら大丈夫だろう。いつごろ来れそうか？」

「すぐ行きます。」

そうやって、俺は家を飛び出した。

夜の9時を回っていた為、辺りは暗く、冷たい風が吹いていた。

プルルルル、プルルルル

「高松刑事、着きました。」

「ああ、すぐいく。」

そう言って、高松刑事が入り口まで迎えに来てくれた。

「やあ、北川君。こっちだ。」

「はい。」

案内され、欧州品室へ案内される。

そこにはすでに、押収した資料とパソコンが用意されている。

パソコンが2台ある。

「もうデータはすべて消されている。何をするんだ？」

「まあ、見ててください。」

この能力はあまりばれたくなかったが、この際仕方がない。そんなことを言われる場合ではなかった。少しでも早く、ジョーカーを捕まえないと。

そして、俺は目をつぶり集中した。

高松刑事はじっとそれを見ている。

数分後。

なるほど。確かに情報はあまり残っていなかった。

「何をしてたんだ？」

自分の能力について話した。

「そ・・・そんなことって。」

「ええ、信じられないですよ。」

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだ。」

「すいません。でも俺、なるべくこういうことにこの力使いたくなくて。なんか自分が犯罪をしているんじゃないかって気分になるんです。でも今回は、ジョーカーを捕まえるためだって割り切ろうと決心しました。」

「そうか。確かに、その力は使いようによっては、恐ろしい脅威になる。だが、逆にその力を持っているのが君でよかったよ。」

「はい。」

「それで、パソコンから何か情報は得られたのか？」

「はい。ジョーカーに関する情報はありませんでしたが、〇〇金融の幹部に関していくつか得られました。」

唾を飲み込み、深呼吸をする。そして、ゆっくりと話し始めた。

「幹部たちが海外にいるという噂は本当です。彼らは、モスクワに潜伏している可能性が高いでしょう。」

「そうなのか、急いで国際警察に連絡してみよう。」

「はい。しかし、そこからさらに逃げられた場合、もう見つけようがありません。」

「そうだな。」

そして、高松刑事は携帯を取り出し、電話をかけ出した。

ジョーカーの情報が欲しかった。

そもそもあいつは人間なのか？

そんな疑問すら浮かぶほど、ジョーカーの存在には謎が多すぎた。

数分が経った。

「健人くん。とりあえず、〇〇金融の奴らに関しては、国際警察に任せよう。

俺らは今後、ジョーカーに視点を合わせて、調べたほうが、効率的だろう。

行かなければならないところがあるんだ。

今日は、この辺で。」

そういつて、高松刑事はジャケットを羽織った。

「はい。わかりました。何かあったら、連絡します。」

「それと、健人くん。その能力には、世界を変える力があると思っている。だから、くれぐれも気をつけてくれ。」

「はい。もちろんです。」

その後、高松刑事は俺を家まで車で送ってくれて、そのまま夜の暗闇に消えていった。

「あとは、ジョーカーだけか。」

何か手がかりはないだろうか。

「ちょっと、ケンちゃん。ご飯も食べないでどこ言ってたの。」

「母ちゃん。まだ起きてたの？
ごめん、ちょっと用事があって。」

「まったく。お腹は？空いてる？」

昼から何も食べてない。

「ああ。空いてる。」

「全く、しょうがない子ね。」

そうやって母は、静かにキッチンへ向かった。

母という存在はすごい。

無償の愛か。俺には当分、理解できないだろう。セイラの事は好きだけど、そういうのとは別次元の話なんだろうな。

「俺も手伝おっか？」

「何よ、急に。」

俺は、病院に通って、いろいろな人を見ていく中で、家族に対する気持ちが大きく変わった。

もちろん、感謝はしていた。でも、存在自体が当たり前だと思っていた。

そうじゃない。本当はすごいことなんだって。

「これ切ればいい？」

「うん。ケンちゃん、包丁使えるの？」

「バカにしすぎだよ。そのくらいできるって。」

多分サラダに使うのであろう。キャベツを切る。

「母ちゃん。」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「何よそれ。気になるじゃない。」

いてっ。案の定だ。

「あら、だから言ったでしょ。血出てるじゃない。」

人差し指を切ってしまった。

「絆創膏持ってくるからね。」

「大丈夫だってこんなの、ツバ吐ければ治るから」

母ちゃんが救急箱を取り出す。

「どこ？傷口は？」

「ああ、ここだ。ん？あれ、どこだっけ？」

「何よそれ。まあいいわ。自分で貼っというて。あとは私がやっつくから。」

あれ、血まで出てたのに。

傷口がない。

そんな時ふと、ジョーカーの顔が頭をよぎった。

あいつの薬によるものか。

数分後。

「できたわよ。」

肉じゃがだった。

おふくろの味ほどうまいものはない。

この料理には勝てるのなんてねえよな。

「ありがとうございます。いただきます。」

その後俺は風呂に入り、部屋に戻る。

明日はバイトか。もう寝よう。

そして、1ヶ月が立った。

朝起きて、窓を開ける。

そろそろ暖かい季節だ。

涼しくて、気持ちのいい風が吹いている。

ふと携帯を開くとメールが入っていた。

新着メッセージ：2件

メールはセイラだろう。

最近セイラともよくデートをしている。

あんまりお金はないが、それなりに彼女を楽しませられている自信はある。

未だに、告白はしてないが。

「健人さん。おはよう。

昨日はドライブ楽しかった。

また連れて行ってください。」

という内容だった。

「ああ。また行こうな」

そう返事を返し、もう1件のメールを見る。

カズからだった。

「父さんに認めてもらった。子供が生まれたら、式を挙げることになったよ。ケンちゃん。いろいろありがとな。」

すごく嬉しかった。アリスの父さん認めてくれたんだ。

「よかったな。挙式楽しみにしてる。仕事見つかったのか？」

と、返事を返し、俺は1階へ向かった。

「ケンちゃんおはよう。」

母が、皿を洗いながら、ニコッと笑った。

父は、新聞を読みながら、コーヒーを飲んでいる。

梨花はもう学校へ行ったようだ。

「ケンちゃん。朝ご飯は、いつものでいい？」

「ああ。」

「なあ健人。」

珍しく父が話しかけてきた。

「どうしたの、父さん。」

「お前仕事の方はどうなんだ。」

「ああ、まあビデオ屋のこと？まあ、それなりに、」

「違う、就職のことだ。そろそろいい年なんだし、仕事見つけた方がいいんじゃないか。」

その通りだ、何も間違っていない。今年で俺は24になる。それなのに、フリーターをしているのだから。

「ああ、ちゃんと探すよ。」

「あと3年で父さんも定年で、働けなくなる。俺のことは別にいい。だが、母さんと、梨花はお前が守っていかなければならないんだ。」

「わかってるよ、父さん。」

ちょうど母が、味噌汁とご飯を持ってきた。

「これ食べて、今日もバイト頑張るのよ。」

「ありがとう。」

バイトへ向かい、竹盛いつものようにくだらなことを話しながら、バイトが終わる。

カズから返信が入っていた。

「ああ、近くの工場で働かせてもらうことになった。詳しくは、今度の飲みながら話そう。落ち着いた

たら、また連絡する。」
という内容だった。

帰り道、一人で歩いていると電話が鳴った。

着信は、非通知からだ。

「はい、もしもし」

「北山様。お久しぶりです。」

この声は。

「ジョーカー!!!」

「ひどいじゃないですか。警察にあの公園のことバラすなんて。おかげであそこにはもう行けなくなっちゃいました。お気に入りだったのになー」

「そんなの、言うに決まってるだろ。用件はなんだ、お前は今どこにいる、」

「あ、お客様が来たので、掛け直します。」

「ふざけるな、要件を言え。おい・・・」

切りやがった。

と、同時に電話がかかってきた。

高松刑事からだった。

「高松刑事、今ジョーカーから、、、」

「健人君、ジョーカーの居場所がわかった。」

「えっ、本当ですか？」

「ああ、とにかく今から家に迎えに行く。」

「わかりました。」

そして俺も、走って家に向かった。

「母ちゃん、ごめん。今日ご飯いらない。」

「外で食べるの？」

「ちょっと用事ができちゃって。」

「そう。」

俺は急いで階段を上った。

部屋に入り、荷物を置く。

そして、玄関で高松さんを待っていた。

「ケンちゃん。これ持って行きなさい。」

母がおにぎりを持っていた。

「何しに行くのかわからないけど、ご飯は食べなきゃだめよ。」

「ありがとう母ちゃん。」

「気をつけるのよ。」

「え？」

「あなた今、昔のお父さんのような顔してるわ。」

「どうしたの、急に？」

「お父さん、何か大事なことがある時はね、今のあなたのような凛々しい表情をするの。」

親には、なんでもお見通しか。

「だから、気をつけなさい。」

「ああ、ありがとう」

と、同時に電話が鳴る。高松刑事だ。

玄関を開けると、高松刑事の車があった。

急いで乗り込み、俺たちは“ジョーカーの居場所”へ向かった。

8 Before Queen

高松刑事が、サイレンを鳴らす。
全力疾走で走り出した。

「一体ジョーカーはどこにいるんですか？」

「ああ、港中央研究所って知ってるか？」

「ああ、一度ネットで見たことがあります。確か、ある難病を治す薬を開発したとか。」

「そうだ。実は、その港中央研究所の地下には別の研究所がある事を突き止めた。」

「それって。」

「ああ、多分君が監禁された場所だ。ジョーカーはそこで研究を行っている。
今、その研究所には既に多くの警察が向かっている。何せ、指名手配犯が隠れているんだからな。」

走ることも数分。
そして俺たちは、港中央研究所についた。
既に騒がしく多くの人が行き渡っている。

「人質はいるんですか？」

「まだわからない。とにかく今は、研究所内の人を外に逃がさなければ。」

そうやって、高松刑事は、研究所内へ入っていった。

俺も、後を追いかけて研究所内へ入ろうとした。

「あれ？」

一瞬セイラの姿が見えた気がした。
なんでこんなところに？

「おい、セイラ！」
大声で呼びかけるが、人が多すぎて聞こえないのだろうか。
追いかけるが、見失ってしまった。
辺りは一面、人だらけで混乱状態になっていた。

とにかく俺は、研究所内へ向かった。

一先ず、研究所内に人はいなくなったようだ。

「高松くん！」

「どうも。山本警部補。」

「一般の方はこの建物から出すよう指示をしたはずだ。 」

「いえ、健人くんは協力者です。彼がいないと、この事件は解決出来ません。 」

「しかしね、君。一般人を巻き込めるわけないだろ。 」

「あの、俺からもお願いします。ジョーカーは俺に会いたがっているはずですよ。何か危険があれば、すぐに逃げますから。 」

「万が一何かがあってからでは遅いんだ。 」

「そんなことを言っている間に、ジョーカーに逃げられてしまいます。それに、直接ジョーカーと繋がりがあるのは俺だけです。 」

「しかしねえ・・・」

ちょうどその時、山本警部補の携帯が鳴った。

「ちょっと、君たち。ここで待ってなさい。 」

「健人君、今の内だ。 」

そうやって、高松刑事がエレベーターへ向かう。

俺も後を追った。

「ちょっと、君たち！」

後ろの方で、山本警部補の声が聞こえた。

俺らはエレベーターに乗り込み、地下へ向かった。
この扉が開かれる時、俺はジョーカーと対面する。
今度こそ、絶対にあいつを捕まえてやる。

ドアが開いた。

なんだここは。真っ白い部屋。確かに以前、俺が誘拐された時に監禁された部屋に似ている。
しかしそこには、机が並べられ、たくさんのコンピューターが無数にあり、紙も散らばっていた。
人はいない。もちろん、ジョーカーも。

くそ、逃げられたか。

俺と高松さんは、何か手がかりとなるものを探した。

ウィーン

急に大きな機械音がなった。

何もない真っ白な壁が、開いた。

ドアだったのか。

「あらあら、北川様。ここで何をしていますのですか？」

「ジョーカー！」

「隣の方は刑事さん。」

「お前がジョーカーか。」

「はい。初めまして。以後、お見知り置きを」

高松刑事が銃を取り出し、ジョーカーへ向ける。

同時に、ジョーカーが俺に銃口を向けてきた。

「危ない危ない。刑事さん落ち着いてくださいよ。」

緊迫した空気が走る。

「刑事さんが撃っちゃったら、びっくりして私も撃っちゃうかも。」

「今すぐ銃を降ろせ。ここはもう完全に包囲されている。」

くそ・・・足が震えてる。

前に銃口を向けられた時も俺は、何もできなかった。

「包囲されちゃったのかー。俺ももうここまでってわけね。」

「分かったらさっさと銃を降ろせ。」

「ねえ、北川様。私は君に力を与えた。そして、今あなたは生きてる。その上、自分で自分の脳をコントロールすることにさえ成功している。今やあなたの脳は他の人の3倍。つまり、30%以上が使われていることになる。」

「3、30%・・・」

「すごいと思いませんか。私の予想が正しければ、今後もまだ進化を続けるはずです。この研究はいずれ世界を変える。さらに人類は進化し、いずれは脳の全てを・・・100%使うことも夢ではなくなる。世紀の大発見だ!!!」

「それと引き換えにお前は、多くに犠牲者を出した。この研究はお前がすべきでは無い。日本にはもっと優秀な科学者がたくさんいる。きっと彼らが、もっと正しい方法で、この研究を成し遂げてくれる。」

「ははは。優秀な科学者ですか。北川様。あなたはまだわかっていない。この世の醜さを、この世の恐ろしさを。」

頬に汗が流れ、垂れ落ちる。

「なぜ私がジョーカーと呼ばれているかわかりますか。所詮私は捕らわれの身。」

「ど、どういう意味だ。」

エレベーターの開く音がした。

機動隊が乗り込んでくると同時に、ジョーカーを囲む。

「諦めろ、ジョーカー！」

「私もここまでですね。十分楽しませてもらいましたよ。私の実験体は、私が処分しなければ。でなければ、あの醜い研究者共に利用されてしまう。」

「やめろ、ジョーカー！！！」

え？

パン

パパパパパン

一発の銃声の後、無数の銃声が白い空間を響き渡る。

訳がわからなかった。

ただ一つ、わかったことは。

俺の腹部から血が出ているということ。

「健人くん！大丈夫か！健人くん！！！」

高松刑事が俺を抱きかかえ、叫んでいる。

だんだん意識が朦朧としてきた。

気づいた時、俺は担架で運ばれていた。

なぜか視界は、はっきりしてきた。
隣で、高松刑事が俺を心配そうに見ている。

「健人くん。大丈夫か？」

俺は起き上がった。

「はい。なんともないです。」

救急隊員が驚いている。

「そんなはずはない。」

そういつて、高松刑事が俺の腹部を見るが、傷一つ付いてない。

やっぱりそうか。

第二段階。

治癒能力だ。

まさかあいつの薬に助けられるとは。

しかし、撃たれても治るって、一体どれほど恐ろしい薬なんだよ。

とにかく俺は病院に運ばれた。特に、けがはなかったが。

その後色々と検査をしてわかった事がある。

体内にまだ銃弾があるそうだ。

あくまで傷口が、治るだけなんだな。

結局俺は手術を受けることになった。

ただ、銃弾を取り除くだけだったので、すぐ終わった。

家族には連絡を入れなかった。

心配されるのが嫌だった。

手術が終わるのを、高松刑事が待ってくれていた。

「もう大丈夫か？」

「はい、傷もすぐ治りました。」

「そうか。家まで送るよ。」

「ありがとうございます。」

車に乗りながら考えていた。

「手術をしてくれた先生が驚きながら言ってたよ。

「君の体、メスを入れてもすぐにくつつくんだ。」って。」

「ですよ。」

それもそう。カラクリは俺もわからない。
わかるのはジョーカーだけだ。

ジョーカーは俺が撃たれた後、多くの弾を受け、死んだそう。

結局、謎だらけだった。
その後の調べでも、ジョーカーの身元を把握する事は出来なかった。

さらに、あの時ジョーカーが出てきた白い扉だが、例の公園近くの下水に繋がっていたそう。
それで、よくあそこに現れていたのかもしれない。

さらに、ジョーカーが死ぬ間際に行った「俺は捕らわれの身だ」という言葉。
まだずっと気になっている。
どうということだろう。

「ジョーカーが死ぬ間際に行っていたこと覚えてます？」

「ああ、捕らわれてるって話だろ。」

「はい。結局あれはどういう意味だったんですかね？」

「さあな」

まだ、明らかにされていないことが多すぎる。
それにジョーカーが死んでしまい、俺の体で何が起きているのか、迷宮入りになってしまった。

「まあいいじゃないか。これでもうジョーカーはいなくなった。犠牲者が出ることもない。」

「そうですね。」

確かに、これで一安心だ。
きっとまた、平穏な毎日が戻ってくるはず。

「この後どうするんですか？」

「これから俺は、署に帰って始末書だ。一般人を怪我させちまったからな。」

「でももう怪我してないですよ。」

「それもそうだな。でも俺は、山本警部補にカンカンに怒られるんだろな。」

「大変そうですね。」

「ああ。もう慣れちゃったけどな。」

「そういえば、北川君は今なにやってんの？」

「レンタルビデオ屋でアルバイトしてます。」

「そうか、もったいねえな」

「え？何がですか？」

「警察官、向いてると思うけどな。死なないし。」

「なんですかそれ、おちよくってます？」

「違うよ。本当に思ってるって。」

でも嬉しかった。

警察官か。

悪くないな。

俺は家に着き、高松刑事にあいさつをして、家に入る。

「ケンちゃん、おかえり。」

母が朝ごはんを作っていた。

「こんな時間になってごめん。」

母は、何も言わなかった。

怒られると思っていたが、全て知っているかのようだった。

そして、父さんも起きてきた。

「おはよう、健人。朝帰りなんて、若いな。ほどほどにしろよ。」

「ああ、父さん。それより、話がある。」

「どうした。」

「俺警察官になりたいんだ。」

「警察官？そんな簡単な職業じゃないぞ。それに経営を学んで、会社を起こす事が夢だって言っていたじゃないか。」

「確かに、そうだった。でも、最近色々学んだんだ。それで、人助けの喜びに気づいた。病院で患者を助けることもそうだし、警察官として市民の命を守ることも。だから、これから必死で勉強する。警察官になれるのは、まだまだ先の事かもしれない。でも、絶対に諦めないから。」

必死に自分の思いをぶつけた。

父さんもまた、真剣な表情で俺のことは見ている。

「健人、大きくなったな。お前の口からそんな熱いことを聞いたのは初めてだ。」

「じゃあ、目指してもいいの？」

「自分が何をすべきか。決めるのは自分自身だ。」

「ありがとう。父さん。」

「ケンちゃん、よかったわね」

「ああ。」

「ふあ～。おはよ～」

梨花があくびをしながら降りてきた。

「あら、みなさんおそろいで。」

「梨花、お兄ちゃんね、警察官になるんだって。」

「ちよ、母さん。わざわざ言うことないだろ。」

「へえ～、健人が警察官！無理でしょー。」

「なんだよ、うるせーな。」

よかった。

こうやって家族といつまでも幸せに暮らしていきたい。

そして俺はバイトに向かう。

昨夜あんなことが起きたし、一睡もしていないからさすがに疲れた。

治癒能力があっても、疲れは消えないんだな。

「先輩、おは一つす。」

「おう、竹盛おはよう。」

「なんか先輩筋肉つきました？」

「え、そうか？別に鍛えてはないけど。」

「前よりなんか、たくましくなりましたね。」

いろいろあったからな。肉体的にはわからないが、精神的には少し、強くなっただろう。

バイト終わり、竹盛と別れ、家に向かって歩いていた。

「健人さん。」

後ろの方から声がした。セイラがだった。

「セイラ、どうしたの？こんな時間に。」

「たまたま近く通ったので、もしかしたら健人さん、ちょうどバイト終わるかなと思って。」
待ってくれてたんだ。

「一緒帰ろっか。」

「はい。」

二人で並んで歩き始める。

「そういや昨夜、港中央研究所の近く歩いてなかった？声かけたんだけど、人混みがすごくて」

「え？昨日の夜はずっと家にいましたよ。 港中央研究所？なんですかそれ？」

あれ、見間違いだったのかな？

まあいっか。

「いや、なんでもない。それより今日はバイトだったの？」

「はい。今度また病院に来て下さいね。健人さんに会いたって人沢山いるので。」

「そっか。俺も人気者になってきたな。」

「はい。今ではすっかり有名な霊能者です。」

「霊能者か。なんか胡散臭いな。」

フッフ。と笑うセイラ。

「そうですね。」

「それと俺、警察官目指すことにした。」

「いいじゃないですか。健人さんにびったりだと思います。」

「ありがとう。俺もセイラを見習って、人の役に立ちたいって思ったんだ。」

「そっか。さすが健人さん。健人さんは、そういう道の方がいいって思っていました。だって、経営の才能なさそうだし。」
そう言って、再び笑った。

「なんだよそれ、ひどいなー。」
可愛い顔して、たまにすごい毒吐くよなー。

でも、この笑顔に何度癒されたことか。

ずっと気持ちを伝えたかった。
ちょうど、二人っきりだ。
今しかない・・・男だろ！勇気出せ！！

「なあ、セイラ。」

「え？どうしたんですか急に真剣な顔して。」

「実は、」

「もしかして告白ですか？」

ちょ、まじかよ。前もそれ言われた気がする。

「ああ。その・・・」

静まり返る二人。
心臓の音がすごい。こんな感情は久しぶりだな。

「好きだ。」

その3文字をしゃべるだけで、なぜか体が軽くなった。
ついに言えた。

「私もです。」

飛び跳ねたいくらい嬉しかった。

正直、住む世界が違うと思っていたし、一生かかっても、両思いになんかなれないと思っていた。

「ほんとに？俺でいいの？」

「もちろんです。健人さんがいいんです。」

「あ・・・ありがとう」

「いえ、こちらこそ」

そう言って、再び歩き出した。

「でも実は、」

唐突にセイラが喋り始める。

「健人さん、私に告白したの初めてじゃないんですよ。」

「え、そうだっけ？」

「そうですよ。忘れちゃったんですか？」

えーっと。思い出せない。普通そんな大事なことを忘れないんだが。

「健人さんの部屋で。」

「あっ、やっぱりあれ伝わってたんじゃない。」

「へへへ。嬉しくてつい」

「なんだよそれー。うわーはずかしー」

そして、2人の若いカップルは暗い夜道へ吸い込まれていった。

筆者からのコメント。

いやー。ここまで読んでくれた方々。本当にありがとうございます。

誤字脱字、内容の矛盾、ストーリーへの提案や感想。なんでも、お気付きの点がありましたら、メールをいただけると幸いです。「脳力」ですが、まだまだ謎が隠されていますね。第2章も続けて書いていきたいと思っています！

ご覧いただき、誠に、誠にありがとうございました。

作 : Tomaty